

JARO XIII

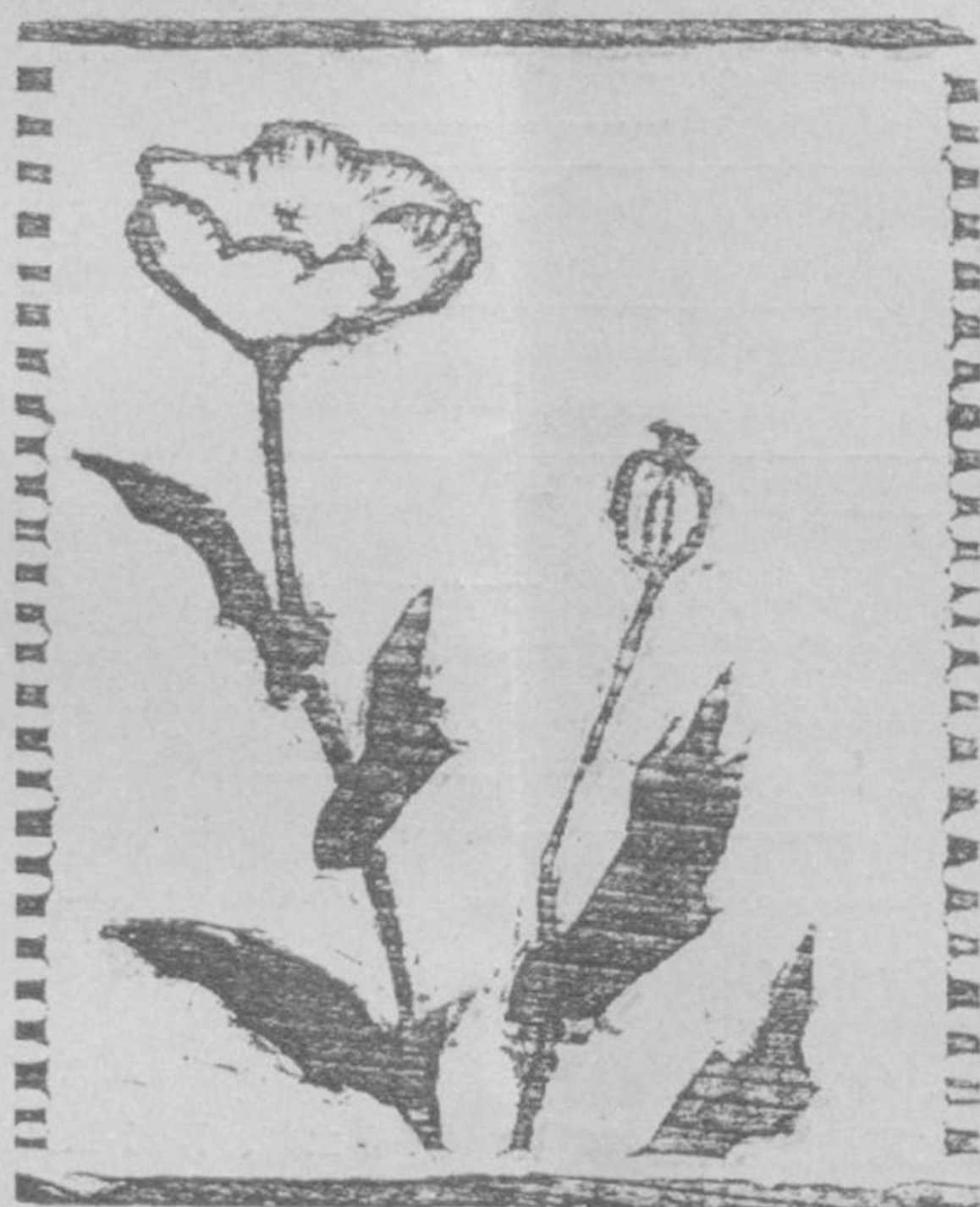
N-RO 7

エスペラント研究雑誌

JULIO

1932

# LA REVUO ORIENTA



JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO



# LA REVUO ORIENTA

## 目 次 ENHAVO

再 び 拍 車 を (Ree ni spronu nin) .....	241
陳情書提出に就て (Petskriboj al japana kaj manĉuria registaroj) 高橋邦太郎...	242
Esp. と 世 界 の 言 語 (Esp. kaj la lingvoj de mondo—L. Ĵirkov) 高木 弘 譯...	244
再歸代名詞を中心として (Pri refleksiva pronomo) .....	高 橋 運...247
検 察 官 (註 譯) (La Revizoro) [por lernantoj] .....	小 坂 狷 二...248
言 語 愚 考 (Sen rompo kaj sen forigo) .....	西 川 四 郎...250
質 疑 應 答 (Lingvaj respondoj) .....	小 坂 狷 二...252
Parola Metodo の 話 (Pri parola metodo) .....	岩下順太郎...254
和 文 エ ス 譯 添 削 (Gvido por tradukado) .....	多羅尾一郎...256
文 法 研 究 課 題 (Problemo de gramatiko) .....	259
處 變 則 品 變 (Aliloke, alimaniere) .....	小 坂 狷 二...260
新 刊 紹 介 (Recenzo) .....	261
椰 子 の 實 (唱 歌) (Kokoso) [Popolkanto] .....	穴 戸 圭 一...263
荒 野 (續譯小説) (Dezerto) [Romano de Kōga] .....	南 品 世...264
海 外 報 道 (Eksterlanda kroniko) .....	宗 近 眞 澄...268
内 地 報 道 (Enlanda kroniko) .....	編 輯 部...270
—— 初 等 欄 (Por Komencantoj) ——	
初 等 讀 み 物 (Facilaj legaĵoj) .....	小 野 田 幸 雄...275
外國語を會得するは至難の業 (Ekzercoj en tradukado) .....	小 此 木 貞 次 郎...277
Ĥ の 發 音 (Pri elparolo de Ĥ) .....	小 坂 狷 二...279
諺 の 研 究 (El la proverbaro) .....	小 坂 狷 二...280

## 會 合 御 知 ら せ

下の如く催します、知友お誘ひ御出席を。

1. 川原次吉郎 (新歸朝)、藤澤親雄、大橋介二郎、Karl Maier 諸氏歓迎會  
今秋の日本エス大會準備相談  
TEK 新幹事選任
2. 七月五日 (火) 午後五時半より、新宿白十字 (市電車庫前下車、電車通)
3. 會費 六十錢 (午後七時よりの御出席は十錢)

注意：御出席の方は必ず七月四日夕までに學會宛に御通知下さい

東京エスペラント俱樂部  
東京學生エスペラント聯盟



## ふ た た び 拍 車 を

— Ree Ni Spronu Nin —

今日の文明世界のうち、その最大の部分は、あらゆる意味で、かつて人類の経験した最も大きな動搖の渦にまきこまれ、いたづらな焦燥のうちに、もがきあへいでゐる。

わがエスペラント界も亦、當然、これらの混亂の影響を避けることができなかった。

今、われわれの眼の前に横たはるかすかすの困難のうち、その最も大きなものをあげれば：

- 1) 經濟上の不安
- 2) 一般社會の誤解

の二つである。

第一の困難は、一見われわれのみの問題でないとはいへ、それがもたらす直接的影響の他に、その壓迫が、一般社會をして、エスペラント運動を閑人の閑事業視せしめるにいたつた。

第二の困難は、エスペラントの分野が擴大され、左翼方面の文化運動にも重要な役割を演じはじめた結果、社會の、小さからぬ部分が、エス語を、この種思想の媒介物視するにいたつたことである。

以上二つの見解は、いづれも認識不足によるものであるとはいへ、われわれは、十分な用意を整へて、彼等に正しき認識を與へるやう努めるべきである。

われわれは、ここに、ふたたび、われわれ自身に拍車をあてて、この重大なる時機を戦ひ、一層確かな足場を明日に築きあげるため、最善の努力を拂はなければならない。

この時にあたり、別項記載のとほり、内務、文務兩大臣宛に陳情書提出のことが企てられたのは、まことに意義ありといはなければならない。

さらに、これと同時に、新國家滿洲國政府當局者に對しても、友邦日本のエスペランチスト團の名において、同様な陳情書を差出し、建國勿々の時に、すくなくとも、エスペラントに就いての關心を持たしめることはたしかに機宜に適したものである。

會員諸氏は、一人のこらず、この主旨に賛同され、この行動に参加されんことを期待する。



# エスペラント陳情書提出に就て

高橋邦太郎

東京市麴町區一番町三番地

正三位勳一等  
大學教授子爵  
山川太郎 印

明治十五年三月五日生

今回次の如き陳情書を、内務大臣、文部大臣、及び滿洲國政府へ差出すことになりました。廣く全國同志の署名を集めて、陳情書と一緒に提出したいと思ひますので、雛形の如き書式により、署名用紙に署名捺印の上、七月末日までに、臨時陳情委員會假事務所（京都市外龜岡町エスペラント普及會）宛にお送りを願ひます。

用紙は雑誌に同封してありますが、もし不足の場合は、普通の半紙を間に合はして下さつて差支へありません。

因みにこの陳情書を提出するために臨時陳情委員會を開き、八月初め同委員會を経て、それぞれ提出される筈であります。

尙今日までに、右計畫に賛意を表され、若くは已に署名された芳名は次の通りでございます。

浅井大阪外語教授、浅田長崎醫大教授、植田長崎醫大教授、井上前東北大總長、上野孝男氏、大井學氏、大石高層氣象臺長、岡本好次氏、小坂狷二氏、尾崎行輝氏、川上慶大助教授、川島鹿兒島高農教授、川村醫學博士、北島鹿兒島高農教授、木全陸軍少將、木下前東大教授、黑板東大教授、古屋野長崎醫大教授、重松前鹿兒島高農教授、清水平塚農學校長、下瀬陸軍々醫監、高楠文學博士、高橋醫學博士、谷口鹿兒島高農教授、出口宇知磨氏、土岐東朝部長、西東大教授、藤澤前九大教授、細川大阪帝大助教授、穂積法學博士、本多東北大總長、松隈東北大助教授、村田醫學博士、村田鹿兒島高農教授、三島子爵、三石五六氏、美野田琢磨氏、望月醫學博士、柳田東朝顧問、山本海軍造船中將、渡邊醫學博士（以下省略）。（以上五十音順）

## 注 意

1. 用紙は1枚に5人署名が出来るやうになつてゐる故、御自身以外に、知人の署名もとつていただきましたし。（但し、5人に満たずとも差支へなし）。
2. 内務大臣、文部大臣、滿洲國政府へと別々に提出する故、同じ人の署名を三枚の用紙各々に記入すること。
3. 成可く毛筆にて。但しペンにても差支へなし。書體は楷書。
4. 印は認印にてよろし。
5. 締切は七月末日。
6. 宛名は、京都市外龜岡町エスペラント普及會内臨時陳情委員會假事務所。

## 陳 情 書

### （甲） 内務大臣宛

近來國際間の關係交渉益々緊密頻繁の度を加へ來り、世界各國に於て、學習容易にして明確且つ絶對中立なる國際補助語エスペラントが愈々廣く深く普及されつゝある事は人類文化の爲、特に言語的に極めて不利の立場にある我日本に取り誠に慶賀に堪へぬ次第であります。

然るに一部に於ては、エスペラント使用者を以て或種危險思想の抱懷者なる如く誤解され、爲に他のエスペランティストにして往々あらぬ迷惑を蒙る事あるは我々の甚だ遺憾とする所であります。

エスペラントは如何なる思想とも特殊の關係を持たぬ事は「ブーロニユの宣言」に依つても明かであります。強ひて求むるならば、現今諸種の國際交渉に於ける如く、二三の國民が世界の他の國民に對して自國語の使用を強制し、従つて其強制されたる國民が實質的、精神的に大なる損失を受けつゝある現状を打破し、何れの國民も國際的交渉には中立的國際補助語エスペラントを使用し、機會均等の實を擧げんと云ふ言語的國際正義の思想に外ありませぬ。我々がエスペラントの普及を冀ひ、又努力する所以は、エスペラントが人類の文化に大なる貢獻をなすものなると共に我日本に對して外交に、學術に、通商に、教育に莫大なる利益を齎らすものなるを信ずる、愛國の至情に出でたものであります。

エスペランティストにして危險思想の者なしとは申しませぬ。然しそれはエスペラント



其物の危険性を示すものでなく、國際用として該語の至便好適なるを示すものであります。最近獨逸リーサ市に於て警察官のエスペラント國際同盟を組織せる如き、又南京政府が機敏にも該語を利用して「世界平和の脅威」と題し、日支事件に關する逆宣傳を全世界に向つて試み、故田中首相の執奏文と云ふを譯載し各國の注意を喚起せるが如きも、エスペラント應用の範圍に制限なき事を如實に物語つて居ます。異民族意思疏通の最捷徑機關として考案された言語の事でありますから、斯く各方面に利用されるのは當然と言はねばなりません。若しエスペラントイストに危険人物があつたからとて語其物を危険視せねばならぬなら英語も、佛語も、果ては日本語も同じ結論になる譯であります。

閣下、我々の意のある所を御明察下され、御管下の諸官にエスペラントに對する正しき御理解を有たれる様御訓示の程伏して御願申上げます。

尙茲に添へました冊子はエスペラントの本質 現状等を詳細に記述しておりますから、御多忙中とは存じますが幸に御清鑑を賜はりますれば私共の本懐とする所であります。

昭和七年 月 日

内務大臣山本達雄閣下

## (乙) 文部大臣宛

近來國際間の交渉益々其緊密頻繁の度を加へ來ると共に學習容易にして明確且つ絶對中立なる國際補助語エスペラントの世界各國に於て愈々廣く深く實用化されて參りました事は人類文化の爲、特に言語的に極めて不利の立場にある我國に取り慶賀に堪へぬ次第であります。

我國の對外關係に於ける現状を見ますに、國語の勢力の貧弱なる爲、外交に、通商に、學術教育等あらゆる方面に實質的、精神的に莫大な損失を蒙りつゝありますから、エスペラントは斯る國よりしてこそ卒先普及に盡力すべき筋合のものと存じます。まして既に各國共盛んに實用しつゝある今日、我國内に普及の要を愈々痛感する次第であります。

普及の最捷徑は學校の教科程に編入する事であると存じますが獨、英、佛、米、オランダ、ハンガリ、チエコスロヴァキヤ等に於ては既に一部の學校に正科或は隨意科として教授され、何れも良好なる成績を収めてゐます。我國に於ても至急其運びにいたす必要ありと

信ずるのであります。

就ては此際御省にエスペラント調査會の如きものを設けられ、該語を小學の上級及び中等學校の科程に編入する事に就て調査を開始せしめられ度、若し斯る急激なる教育制度の改正は然るべからずとあらば、せめては英國エックルス小學校の例に倣ひ、試験的にでも教授を開始する事に就て調査を進めしめられ度、困難な發音、不規則な文法、難解な慣用語等の爲め我青年男女が修學時間の大部分を浪費し、而かも其能率の擧らざる事甚だしき外國語を今尙普通教育の重要科程と見做しつゝある現状に鑑み、茲に赤心を披瀝して御清鑑を仰ぐ次第であります。

尙調査會御設立の際御下命あらば陳情委員に於て經驗と識見を有する最も適當な人々を推薦致すべく準備のある事を附記致します。

茲に添へました冊子はエスペラントの本質及び世界に於ける該語普及の現状等を正確に示して居ります。御參考の資とならば本懐の至りであります。

昭和七年 月 日

文部大臣鳩山一郎閣下

## (丙) 滿洲國政府宛

謹んで申します。

内は濟世安民、外は門戶開放機會均等の旗幟を掲げ、茲に潑刺たる威容を東亞の天地に現出されたる、貴國家の誕生に對し滿腔の誠意を以て祝福すると共に、理想政治の實現に向つて着々其經綸を進められつゝある、貴官並びに貴國家の諸官に對し、深厚なる敬意を表する事は我々の最も光榮とする所であります。

さて此機會に於て特に、貴官及び貴國家に進言したい事は、現在全世界のあらゆる文明國に於て頻りに宣傳され實用化され、且つ當然必須なるものとして公認されつゝある國際補助語エスペラントに就てであります。

學習の容易なる事は斯語の最も誇りとする特徴で、西洋人たると東洋人たるとを問はず例へば英語に比すれば、其六分一の努力を以て習得實用し得るのであります。

又如何なる國、如何なる民族の獨占物でもなく、絶對中立でありますから、斯語の使用に當つては兩者全く對等の地位に置かれるので、實質的、精神的に何等の特權も屈從もなく、此點は貴建國の綱領たる機會均等の精神と全く一致するものなると共に、又東洋諸

(246 頁へ續く)



# エスペラントと世界の言語

Jirkov-L.  
Takagi-H. 譯

この論文 (Esperanto kaj lingvoj de la mondo) は 1932 年 EKRELO から出版された《Al la Nova Etapo》にのせられたもの、この本は各國労働者エスペラント團體所屬の言語委員會の國際書記局から出した論文集。著者 Jirkov 教授は SEU 新進の言語學者。

すべての人工的國際語の計畫案の中で、ただ1つエスペラントだけが滅びずに、生きている。エスペラントだけが今後の成功と發展の機會お持っている。

この事實は どういうことを示しているのか？

われわれはエスペラントの主な特長とする  
1) ヨーロッパ共通の用語と語いの國際性と、  
2) 文法の非常な簡単さとお知つている、國際補助語とゆうものわけともこうゆう性質お具えていなければならないのか？

しかし、この性質お持つていなければならないのだ。

ヨーロッパ共通の技術用語は全世界的となつて、少くとも世界的になり始めている。アジアの文化的言語はだんだんとそれお取り入れている。ギリシア、ラテン系の用語はヨーロッパがどこよりも先に技術發達の道お進んでいるためにすべてのその競争相手お打ちまかした。ヨーロッパ的の用語は今までに、また現在でもかなり重要な2つの競争相手お持つていた：その一方はアラビア系用語であり、他はシナの用語だつた。アラビア語は（語の轉來が非常に規則正しいために）技術用語おつくるにわ特に都合がよい、しかもアラビア語の用語はイスラム教（回教）文化の行われているすべての國の言葉に廣く用いられている。この國々でわ socialisto, revolucio, ekonomiko とゆうような單語は今までアラビア語の形で存在している。しかしこの用語はずつと前からヨーロッパのラテン系、主にフランス語形の言葉と戦いつづけている。例えば、ペルシア語でわ oc'ialisto とゆう單語は今でわ ešteraki（意味から言えば：sociiganto）とゆうアラビア系の形でよりわ、susialist とゆう形ですつと、ひんばんに使用されている。専門用語の他の重要な源泉であるシナ語の狀態もほとんどこれと同じだ。シナ語系の用語は日本、その他の極東の國々で利用されたし、現

在も利用されている。そして、その國々で、特に日本でわ、イギリス語の形でヨーロッパ的の用語が流れ込んでいるのが見られる。文化とその技術的根底の共通はこのようにして、専門用語の世界的共通性、それぞれの言語の中の大部分の語いの共通お創る。遠い將來においてわこの歡迎すべき過程は別の性質お持つてであろう：すなわちこの過程は共通的な單一の世界語え向つての出發と考えられることができる。だが用語の共通は未だ、文法上の形の種々異なつた言語お語いの上だけで、たゞ部分的に、統一しているにすぎない。しかし人工的國際補助語はこの専門用語の共通お促進しなければならない。

Zamenhof は自分のエスペラントでこれおやつたのだつた。彼はヨーロッパの共通的な用語の中にあるものおどれでも、すでに與えられたものとして受入れ、充分に手お入れられた用語と非常に簡単な文法との間の衝突おうまくよけたのだつた。最も簡単な文法が用語の不規則さお除き得るところでわ、彼はエスペラントで實際にそれお行つた。規則正しく轉來する instrui, instruado, instruisto の單語は一つがよく知られている國際的な語根お生かしている；redakti, redaktado, redaktisto, redaktejo も同じだ。vorto, vortaro の用語は共通的なドイツ語の Wort, イギリス語の word とわ別な、ドイツ語の Wörterbuch とイギリス語の dictionary, フランス語の dictionnaire の不調和さお除いている。これらの例でわ、文法は語根の基本に必要な分量お減らして、まるで語い調整の手段となる。これは自分の言葉の中にヨーロッパ共通の用語が入りつゝあるか、入り始めた國の人々、すなわちイスラム教文化と極東文化の國の人々にとつて特に役に立つ。このおかげで、この人々おヨーロッパ・アメリカとの用語上の共通さお破ることなく、國際的の用語お自分のものとするとうゆう問題お容易にすることができる。



のだ。

エスペラントはその語いにおいてわまさにわれわれの時代の補助的國際語が合理的に作られなければならないところのものだ。これがエスペラントの成功をお保證している。

しかしエスペラントの文法の組立ての方わどうであらうか？

エスペラントの文法わ非常に簡単だ、恐らく、それで充分なのだ。國際的な補助的文法わ簡単でなければならない。ヴォラピュクとエスペラントの作られている時代にわこの文法の簡単さわたと單なる簡単さとだけしか考えられなかつた。すべての人わこの簡単さの中に實際的な意味を見て、この簡単さわ實地の上で正當とされ、それで充分だと思つていた。その言語學的意味、その言語學的證明わ氣付かれずにあつた。新しい言語學の中で各言語の、世界のすべての言語の段階的發達の問題の解決が大體において描かれた時まで、氣付かずれにある有様だつた。この言語發達段階の問題が解決されたことによつて世界に現存する言語の形態研究に光が投じられ、人類の種々異つた社會的地理的條件の下に、地球上のいろいろな言語の型の廣がりとおひんばんさをお判斷する可能性が現れた。

言語の型式についての現在のわれわれの知識わ無定形的 (amorfa), 付着的 (aglutina), 屈折的 (fleksia)<sup>1)</sup> の言語段階が存在するとゆう結論お與えている。だが、この段階わお互に上の順序で移つて行くのだ。始めから屈折的な言語族や、付着的な語族わ存在しない。1つの段階から他の段階に移つて行く過程わ(特に1言語の中でわ)以前の各段階のもう化石化してしまつた殘存物の集積で複雑お極めている。こうして各言語にわ《多段階性》が存在する。各段階わお互に移り合い、たゞ言語的危機の轉換の瞬間だけが言語お決定的に1段階から他段階に移す。

で、屈折が順序からすればいつでも付着に従つていけるけれども、屈折語が構成の上から付着語よりも必ず複雑だとゆうことでわないのに注意しなければならない。あべこべのこともある。上に舉げた3段階わ、分けることのできない半ば動物的な叫び聲から現代の文化的國民の非常に可分的な談話に至る言

語發達の共通の線に沿うて、談話の可分性に基本的に關係している。可分性の増大わ、經濟的發達の根底に、現代でわ特に革命的に再建されている經濟生活のより大きくなりつゝある集團性の上に立つていける談話上の通達の要求の生長と分化に適應する。無定形的段階でわ言語の全部の單語わ不可變な語の形おとつており；付着的段階でわ普遍的な意味お持つた安定的な不可分的な、またわ辛じて分けられることのできる言語要素(接語)がまだ多量にある、最後に屈折に移ると、普遍的な接語わ大體においてほとんどなく、言語のすべての要素わバラバラになつて個々のお互に結び合せ得る音(音素 fonemo)になる。これが談話の音的な可分性の進化だ；これと平行して意味の可分性も進化する。付着でわ意味の變化わ不變的な意義お持つた(一つの音だけしか含むことわできないけれども)獨立した接語の特質お持つていける要素の結合によつて生じる。屈折語にあつてわ獨立的な形成的な接語の殻が破裂して、意義の不變性わ大部分失われる。形成的な接語の型の多様性やその相互の結合の複雑さや名詞形容詞變化と動詞變化の體系における型の多様性と複雑さが現れる。しかし同時に、かうゆう破裂した破カイされた接語の一部の死滅の過程が始まる。そしてこれわ言語の混合が力お添える時にわ特に(イギリス語、ペルシア語)、體系お形づくつていける屈折の大部分お消滅せしめさらにその結果として、再び文法お簡單ならしめる。イギリス語わ依然屈折語だ、個々の音まで分けることができる、名詞形容詞變化と動詞變化の活用例の多くの型の殘存物まである、しかしイギリス語わ文法の組立の上からして簡單なのだ、多くの付着語よりもズツト簡單だ。

上に舉げた3段階の言語型わ現在世界に存在している。その中間の形も存在している。音の可分性が個々の音の限界にまでまだ達しないような言語わ現代の人類にわもう存在しない。かうゆう段階わ無定形的言語の段階の前でなければならないが、すべての言語わもうそれお經過したのだ。現存する段階型の中で、ヨーロッパ文化お持つた國でわ屈折が支配している。付着、無定形語の世界わ地理的

1) [譯者註] 無定形的言語とゆうのわシナ語のように、一定の文法的形式お持たず、單語の文法的役割が文中の位置によつて定まるものお言い、付着的とゆうのわエスペラント、日

本語のように獨立した意味お持つた語の結合によつて種々な文法變化お行ふもの、最後に屈折的とゆうのわヨーロッパ語に見られるように單に形だけの品詞變化お行ふものお言う



にアジア、アフリカ、アメリカとポリネシアの土着民お、すなわちヨーロッパ以外の大陸のほとんど全體お包容している。言語進化の不均等な速度の結果、一定の時代にわ、異つた段階の言語が同時に併存することができる。異つたまたわ同じ型の他の言語と混じ合つて語い、またわ文法において、豊富になりながら、無定形型の言語でもその基礎の中にわ古い原始状態に充ちた自分の構成を長い間保存することができる。すでに歴史的條件わ言語様式のこの保存に力お與えている。早く發達した階級的社會、支配階級の特殊な書き言葉の早くからの形成、その言語の《國際的》言語えの轉化——これらが、われわれが例えば基本的にわ無定形であるシナ語の中に見る言語保守の要因なのだ。こうゆう形で保存された言語の中で、社會進化の段階、その意味的内容の適應が續いている。言語わ、他の言語と混合する中に、談話おするものに必要なものおすべて他の言語の中から取る。他の言語の要素わ保存された古い構成おくつがえす。保存の要因わそれに對立する、しかし一つの言語の他の後の段階えの移動わ延期されることわできるが、避けることわできない。同様にシナ語の中にわ、付着の澤山の要素が集積している。單語わ安定的な接語になる。だが、シナ語でわ今まで語の位置の統一的な文法的原則（文統一の無定形段階の唯一の原則）が確立しており、生き生きと感じられているので——基礎的にわシナ語わまだ付着的でわないと言われる。無定形的状態から付着的状態えの質的な轉移わまだ起らなかつた、文の統一のための語位の法則に代つて語根が一定の接語と義務的に結びつく法則が行われる時にわそうなるだろう。

以上話した3つの型の言語の中で、でわエスペラントの現代の言語の世界における地位わどんなものなのか？

エスペラントのヨーロッパの屈折語との關係わかなり研究されもし、一般に知られている。だが、ヨーロッパ以外の國の言語、特にアジアの文化的言語との關係わエスペラントイストにわまだ全然ハッキリしていない。もしこの問題が充分に研究されたら、エスペラントイストわ誰もエスペラントお去つて、Ido から Jespersen の新語 (Novial) に至るエスペラント以後の人工語に走らなかつたであらうし、また Jespersen 自身彼の發見力お他の方に向けたことだろう。

(以下次號)

## Rizo! Rizo! Rizo!

Malsato en riĉa rikolto! Surprizo!  
Akiris en kampo tro multe da rizo.  
La rizon bezonas ho ankaŭ dum krizo,  
Sed monon ne pagas en tempo de grizo!  
Atakis la landon de flor' de ĉerizo  
Tumonda nuntempa la karakterizo!  
Legu ne nur ho-rizo-n-tale, ed ankaŭ  
vertik-ale!

*Humure verkis K. H. Sisido.*

(243 頁より續く)

國の如く從來外交上殆んど自國語の權威を沒却すべく餘義なくされし國々に取り大なる福音と言はねばなりませぬ。特に 貴國の如く言語を異にする諸民族の混住する國に在りては斯語の普及は國內的にも亦莫大なる利益を齎らすものなる事を堅く信ずるものであります。冀くは

貴國內に一日も早く斯語を普及されるやう、

又最も近き將來に於て 貴國家の國際用語として斯語を採用せられるやう、其爲め必要な御施設等最も迅速に着手せられん事を。

貴國の洋々たる前途に對し、誠意ある熱望を披瀝し、重ねて 貴官並に 貴國政府諸官に敬意を表します。

附言。貴國と弊國とは同文の間柄でありながら、對話上は申すまでもなく、文書上に於ても相互の了解には隔靴搔痒の憾なきを得ません。此陳情書も禮として貴國文にて認むべきであります。我等同人中 貴國語に通ずる者なく、茲に弊國文にて認めました事は我等エスペラントイストの立場として甚だ不本意に存じます。これに付けても兩國民の自覺に依り一日も早く此簡易無比の中立的交通機關を利用し、相互の關係を一層親密にし愈々共存共榮の基礎を鞏固にしたいと思はずに居られませぬ。

千九百三十二年 月 日

滿洲國々務總理及民政、外交、實業、交通總長閣下

★陳情書提出の費用の支出は發起者側で責任を持たれてゐるが、企ての性質上同志諸氏が幾分なりと分擔される事が望ましい。寄附金の宛名は上記假事務所(振替大阪61040番・エスペラント普及會)



# 再歸代名詞を中心として

高 橋 運

## 追 補 1

主格的 *de* と再歸代名詞の用法に關して私が D-ro Lippmann と別個の見解を有することに就いては、本誌 XII 6 拙稿「再歸代名詞に關する一問題」及び XII 11 本稿 2.「主格的 *de* と再歸代名詞」を再讀せられたい。

その後、エス語界屈指の *stilisto* である T. Jung 氏は（私に宛てた 1932 年 5 月 2 日附書翰の一節に）次の様に述べて居られる、これは氏が *stilisto* であるだけ興味が深いと思ふ。

“*Ŝi ne povis toleri la frostotremadon de ŝiaj infanoj*”—*povas esti korekta, se temas pri la infanoj de alia virino; se temas pri la propraj infanoj, oni devas diri “siaj”*. Tio estas tute klara kaj, laŭ nia opinio, tre simpla. Bedaŭrinde ĉe ni elĉerpigis la broŝureto\* de Lippmann, kaj ni ne povas konstati, ĉu “*ŝiaj*” eble estis nur preseraro.

\* D-ro W. Lippmann の著 „La refleksiva pronomo en Esperanto“ を指す。

## 追 補 2

私が本稿第九項において述べた「人稱の變態」は既に本誌五月號に全文取消を言明したのであるが、それより先き私が同問題につき爲した質問に應じて、D-ro Lippmann は次に掲げる様な解答を與へられた。

Mi rekomendas:

a) *Mi kaj mia edzino mortigis nian propran infanon*

b) *Mi kaj mia amiko mortigis ĉiu*

*sian propran infanon aŭ Mi mortigis mian propran infanon kaj mia amiko la sian*

c) *Mi kaj mia amiko interŝanĝis niajn opiniojn*

d) *Mi kaj mia amiko interbatalis aŭ ... batalis unu kun (kontraŭ) la alia. La aliajn proponojn mi opinias neĝustaj aŭ almenaŭ malpreferindaj.*

Al *mi, vi kaj ni* neniam rilatas *si* aŭ *sia*. En la frazo post a) *mi + mia edzino = ni*. Do: *nia* rilate al la komuna infano. En la frazo post b) manke de komuna objekto ankaŭ komuna pronomo ne estas uzebla. Do *ni* devas aŭ enŝovi la vorton *ĉiu*, al kiu rilatas *sia*, aŭ disigi la subjektojn same kiel la objektojn, donante al *ĉiu* de ili la taŭgan pronomon. La frazo post c) sekvas la regulon de la frazo post a). Oni ne povas kontraŭdiri, ke la *opinioj* ne estas komunaj, ĉar *ĉiu* havas siajn proprajn apartajn opiniojn. Efektive la interŝanĝataj opinioj kune (kiel ili aperas de gramatika vidpunkto) apartenas al *ni* ambaŭ, do ili kune estas *niaj opinioj*. La frazo post d) povus teksti ankaŭ: *Mi kaj mia amiko batalis inter ni*, ĉar *mi + mia amiko = ni*, sed la supre donitaj tekstoj estas pli klaraj, do stile preferindaj.

(16. 4. 1932)

なほ本誌四月號質疑應答欄における小坂狷二氏の解説をも参照せられたい。

附記 この問題に對する私の事實に對する認識はたしかに不足であつた。私の不注意を讀者諸氏に深くお詫びする。



# 官 察 検

Zamenhof 譯 La Revizoro 一節の註譯

K. Ossaka.

Hlestakov.—Mi kun vi, malsagulo, ne volas paroli. (Enversas la supon kaj manĝas.) Kia supo ĝi estas? Vi simple akvon enversis en la tason: nenian guston ĝi havas, ĝi nur malbonodoras. Mi ne volas tiun ĉi supon, donu al mi alian.

Servanto.—Ni prenos. La mastro diris: „Se vi ne volas, oni ne bezonas.“

Hlestakov defendante la manĝon per la mano.—Nu, nu, nu... lasu, malsagulo! (Manĝas.) Mia Dio, kia supo! (Manĝas plue.) Mi pensas, ke ankoraŭ neniu homo en la mondo iam manĝas tian supon: iaj plumoj naĝas anstataŭ graso. (Li tranĉas la kokinon.) Aj, aj, aj, kia kokino! Donu la rostaĵon! Tie estas iom da supo, Osip, prenu al vi. Kia rostaĵo ĝi estas? Tio ĉi ne estas rostaĵo.

H.—手前とは話なんかしたくもない, 馬鹿野郎。(スープをついで飲む)。何てスープだ。たゞ茶碗に水をついただけだ (simple): 味も何もありません。いやな臭がする。こんなスープは御免だ, 他のを持って来い。

ボーイ——ひつこめませう (取りませう)。旦那が云ひますには『あなたがいやと云ふのなら, あげる必要はない』。

H (手で食事をかばひ乍ら)——まア, まア, まア……ほつといてくれ, 馬鹿野郎。(飲む) これやまア, 何てスープだ。(なほ飲む) 世界に於て嘗てかゝるスープ

をのんだる者未だなしだと思ふね。脂の代りに何かしら羽根が浮いてるぞ。(鶏を切る)。これは, これは, これは, 何て云ふ鶏だ, ローストの方を出せ。こゝにスープが少しある, オシツプ, あげるからお飲み (prenu al vi). 何てローストだ。これやローストぢやない。

Enversas la supon: Supo は普通皿に入れず supujo (vazo) に入れて来る故、それを皿について飲む。

Manĝi supon: tranĉilo, forko, kulero や箸を用ひて食事するのが manĝi 故 manĝi supon と云ふ; trinki supon と云へば kulero を用ひず直接口をつけて吸つて飲むこととなる。即ち西洋人は kulero を用ひて manĝi supon し, 日本人は汁椀に口をつけて trinki supon するわけ。

Aj 悲しい時, 痛い時などの間投詞。

Kokino; 前後の關係で見ると supo の中實とした kokinaĵo ならん。

Servanto.—Kio do ĝi estas?

Hlestakov.—La diablo ĝin scias, kio ĝi estas, nur ne rostaĵo. Ĝi estas hakilo, rostita anstataŭ viando. (Li manĝas.) Friponoj, kanajloj! per kio ili nutras? Eĉ la makzeloj ekdoloros, kiam vi manĝos unu tian pecon. (Fosas per la fingro en la dentoj.) Malnobluloj! Tute kiel ligna ŝelo—per nenio oni ĝin povas eltiri; eĉ la dentoj, nigriĝos post tiuj ĉi manĝoj. Friponoj! (Viŝas la buŝon per la telertuko.) Plu nenio estas?

Servanto.—Ne.

H.—Kanajloj! Malnobluloj! Kaj



eĉ nenia saŭco aŭ kukaĵo! Sentaŭguloj! Ili nur prirabas la vojaĝantojn.

ボーイ——そんなら何です。

H.——何だか、わかるもんか(=悪魔は知つてゐる、人間は知らん)、兎に角ローストぢやないね。肉ではなくて(anstataŭ) ローストした斧だ。(食べる)。悪黨、兇漢! 何を食はせて飼つてゐたんだ。貴様こんなの一と切れ食べてみる顎が痛くなるぞ(指で齒をほじくる)。下司野郎! まるで木ッ葉だ——何を持つて來たつて(per) 抜けはせん; こんな物食はされては(post) 齒まで(eĉ) 痣になる。悪黨!(ナプキンで口を拭く)もうこれつきりで(plu) 何もないのか。

ボーイ——へい、ありません。

H.——悪漢! 下司野郎! ソースもなければ菓子さへない! やくざ者奴! 此奴等はたゞ旅客を追ひはぎしやがるばかりだ。

La diablo scias=oni ne scias.

Per kio oni nutras kanarion? カナリヤ饅何を食はせて(餌にして)飼ふのか。

Ni, japanoj, nin nutras per rizo. 吾々日本人は米を食つて生きてる。

ligna ŝelo 木の皮。

Ili rabis de li monujon. 財布を強奪した。

Ili prirabis lin. 彼(の持ちもの)を強奪した、追ひはぎした。

Ni verŝis akvon sur la teron. 地に水をそそぐ。

Ni priverŝis la plantajon. 植木に水をやつた(灌水した)。

[市長の所へペテルブルグの青年がホテルにとまつてゐて少しも金を拂はぬと云ふ注進がある。金を拂はぬのならてつきり檢察官にちがひないと市長はあわてゝホテルへ御機嫌伺ひにとんで來る]。

La urbestro, enirinte, haltas. Ambaŭ timigite rigardas en la daŭro de kelkaj

minutoj unu la alian per larĝe malfermitaj okuloj.

Urbestro iom trankviliginte kaj streĉinte la manojn laŭlonge de la femuroj.—Mi havas la honoron saluti!

Milestakov salutas.—Bonan tagon.

Urbestro.—Pardonu.

H.—Ne malhelpas.

U.—Kiel urbestro de la ĉi-tiea urbo mi havas la devon zorgi pri tio, ke al la traveturantoj kaj al ĉiuj noblaj homoj estu nenia premado.

[市長内へはいり立ちどまる。兩人びつくらして數分間(en la daŭro de...) 目をみはつてお互に見合ふ]。

市長(少しく心を休め氣をつけの姿勢をして=兩手を腿に沿つてのばし)——御挨拶申しあげます(挨拶する名譽を有する)。

H.(挨拶する)——こんちわ。

市長——お邪魔いたします(御免下さい)。

H.——いやかまひませんよ(邪魔にならぬ)。

市長——當市の市長といたしまして旅行者や高貴なお方々に何等お氣づまりがないようにと、そう云ふことを注意いたしますが義務でござりまして。

Laŭlonge de... .....に沿つて。

Femuro 腿, kruro 脚, genuo 膝, kalkano かかと, tibio くるぶし, piedo 足(くるぶしから先)。

Mi havas la honoron (又は plezuron) saluti は Mi salutas の丁寧な云ひ方。

Al kiu mi havas la honoron paroli? = Kiu vi estas? どなた様でいらつしやいますか(君は誰ですかの敬語)。

Havu la bonecon (=Volu; bonvolu) viziti min. どうぞお來訪下さりませ。



## Sen Rompo kaj sen Forigo

*S. Nishida.*

En la j. 1887 Zamenhof diris. “Se mi senigas min nun je ĉiuj personaj privilegioj, fordonas ilin tute al la publiko, mi ĝin faras ne pro malvera modesteco, sed ĉar mi havas la profundan kredon, ke tion postulas la interesoj de la afero, kiu alie ne povus regule kaj rapide vastiĝi kaj ĉiam estus en dependo de unu persono...”

Por la interesoj de la afero kaj por la tute libera evoluado de la lingvo li ne rezervis eĉ ian rajton de aŭtoreco kaj la tutan mastrecon pri Esperanto en tuta pleneco transdonis al la Esperantistoj mem. Kaj li plene komprenis ke por la evoluo de la lingvo ne estas bezona la loko de “kondukanto aŭ leĝdonanto.”

Pri la lingva evoluo ni aŭdos liajn forte pravajn vortojn. “Per unu vorto—la lingvo internacia devas vivi, kreski kaj progresi laŭ la samaj leĝoj laŭ kiaj estis ellaborataj ĉiuj vivaj lingvoj.”

La lingvo evoluas tute libere per la praktika uzado de la lingvo-uzantaro. Pli kaj pli ĝi ellaboriĝos kaj ĉio necesa al ĝi, kio kreiĝos kolektive per longa lingvopraktiko. Per unu vorto—en la spirito de demokratio.

Oni komprenos liajn mirinde pravajn vortojn, “Mi ne havis la intencon...krei laŭ mia persona plaĉo la tutan lingvon de l’ kapo ĝis la

piedoj...Kiel lingvo tutmonda, la persona juĝo kaj decidoj de unu homo devas havi rolon eble plej malgrandan...Unu homo tie povas esti nur iniciatoro sed ne kreanto. Lingvo tutmonda devas esti pretigata paŝo post poŝo, per la kunigata laborado...” (Kiel modeste sed prave!)

Kaj krom la Fundamento “ĉio cetera devas esti kreata de la homa societo kaj la vivo, tiel kiel ni vidas en ĉiu el la vivantaj lingvoj.”

En la lingvo ni ofte, ironie ofte, renkontas du vortojn kaj du formojn, el kiuj ĉiu estas ankoraŭ reale uzata. Kion fari tiam? Li neniam diris ordonemajn vortojn, kiuj forigas unu, aŭ alian. Ni ĝoje ricevos de li instruon. Almenaŭ li fakte ne diris pretendeme ke tiu estas ĝusta kaj alia erara.

“La vortoj (ankaŭ la formoj) kreitaj malfeliĉe baldaŭ perdiĝos, kaj la vortoj feliĉe kreitaj restos kaj eniros en la lingvon; la vortoj egale feliĉe kreitaj sed malegale sonantaj—kelkan tempon batalos inter si...Jam post mallonga tempo ni vidos, ke unu el tiuj formoj estas uzata pli ofte...ol ĉiuj aliaj formoj.—Kaj la unua formo elpuŝos ĉiujn ceterajn formojn, kiuj post kelka tempo simple mortos de neuzado.”

Kiel konkrete kaj mirinde prave!



Ni staru sur la Zamenhofa principo kaj faru ian ajn esploron sur tiu ĉi alte supera sed praktikema bazo!

Liaj admirinde geniaj vortoj sonas, “Ĉiu vorto, ĉiu formo, kiu ne estas rekte kontraŭ la jam kreita gramatiko kaj vortaro, aŭ kontraŭ la logiko aŭ la leĝoj enkondukitaj de la plejmulto de l’ uzantoj—estas tute bona.” Kaj per mirinde simplaj vortoj li esprimas la evoluon de la lingvo kaj ĝian procezon. Tio estas “natura irado.” Kiel ĉiu alia lingvo, tra la vojo de neologismoj kaj arĥaismoj. Kaj novaj kaj arĥaikaj formoj. Paralele ekzistantaj vortoj aŭ formoj, kiuj ambaŭ estas fortaj! Konkure! La “pli bona iom post iom elpuŝos la malpli bonan.” La demokratieco estas la faktoro kaj forta flanko de la venko de Esperanto. Kion li diris pri la pereco de Volapük? “Volapük pereis ĉefe pro unu grava eraro, kiun ĝi bedaŭrinde enhavis: absoluta manko de natura evoluipovo: kun ĉiu nova vorto aŭ formo la lingvo devis konstante dependi de la decidoj de unu persono aŭ de facile inter si malpaconta personaro.” Profunde-pensa kaj akrevida estas li! Ĉion, kio mankis en tiu lingvo, jam havis Esperanto. Kaj li tute kredis la forton de kolektiva kreado de Esperantistaro kaj konfidis. Nur per tiu vojo ĝia sukceso estas ja garantiita. Por la genio la vorto “kateni” estas ne nur malŝatindaĵo sed li penis lasi al sia lingvo “tute liberan evo-

luadon (ne anarkian).” Evoluipovo!

Li ofte uzis la vortojn, “riĉiĝi”, “pliboniĝi”, “elastiĝi”, “fortikiĝi” kaj “perfektiĝi”. Estante ne rigidaĵo sed vivantaĵo, la lingvo ĉiam evoluis. Ni devas alte teni lian genian principon kiel standardon. Se ne, ni devos ripeti liajn vortojn, “komenci inter si ĝis nun ankoraŭ ne finiĝantan kaj neniam finiĝontan diskutadon.” Ekz. Estus tiu, kiu asertus ke “lia” estas pli ĝusta ol “sia” en la propozicio kiu havas la verbon “nomi”. Sed Zamenhof ne faris individualistan juĝon, nek tiel decidis verdikton. “La praktika uzado de nia lingvo fariĝas pli kaj pli granda.” Tio samtempe estas la kolektiva kreo kaj laboro de uzantaro. Per tio estos evoluo kaj eĉ selekto de vortoj kaj formoj. Unu fariĝos senviva aŭ malpli ofte uzata. Ni bone memoras liajn vortojn, “per la sankcio de komuna, praktika uzado.” Per tio pli ekzakta senco fiksiĝos kiel tradicio. Per tio eĉ senkonscie uzantaro proprigas al si “la senton.” Por la ekzemplo supreskribita bone taŭgus liaj vortoj, citite; “Ia pure teoria kaj praktike absolute senvalora motivo estus sensencaĵo.” Lia brilanta principo! Oni estos liberaj de severe teoria motivo, kiel li! Oni bone komprenos ke ni povos indukti, sed ne unu facile povus sola doni decidon, kaj ĝin nur povos Esperantistaro, ĉar ili selekte malpli ofte



# 質 疑 應 答

(Lingvaj Respondoj)

K. Oosaka

★模範エス獨習 p. 156 冠詞の用法に『特定』と云ふのは (a) 或る限られたるもので、(b) 話し手の知つてゐるもの、且つ (c) 聞き手もあゝあれかとわかる條件附の事物のことである。此の三者の一つが缺けても特定とは云へないとあるが次の (1) 及 (2) の例では (c) の條件が缺けてゐないか。又 (3) の例で *li* の時は不定で *studento* の時は特定と云はれないか。〔S. M. 氏〕

(1) *La libro* estas sur la tablo.

(2) *Ĉu tio* estas *la edzino* de S-ro Kosuge?

(3) *Ĉu li* estas *studento* de Komerca Universitato?

〔答〕 (1) 同書 p. 154—155 に説明した如く是は『あの昨日買った本はどうしたろう』など尋ねられ『あなたのさがしてゐるその本なら机の上にある』と教へる場合。依てどの本でもよいのではない即ち條件 (a) に當る。話し手は既に知つてゐて教へてゐるのであるから條件 (b) に當はまる。又 *la libro* と云はれゝば聞き手はすぐと『はゝあ私の捜してゐる本のことを云つてゐるのだな』とわかる、即ち聞き手にも『あゝあれか』とわかる故條件 (c) も缺けてゐない。もし此の場合 *la* がなくば『君の捜してゐる本だか、それともちがふ本かも知れないが兎に角本が机の上にある』と云ふ意味で (c) の條件は缺ける。

(2) 話し手は勿論小菅氏の妻君であると教へてゐるのだから知つてゐる (條件 b), 聞き手は教へて貰ふ位だから勿論知

らないのではあるが小菅氏の妻君と云へば二人とはない筈、よつてそう教へてもらへば他の者ではないそのきまつた妻君と云ふことがわかる、即ち *edzino* なる語の意味の上で *de S-ro Kosuge* と説明がつけば『あゝその妻君か』とわかるのであるから條件 (c) に當てはまる。勿論條件 (a) には當てはまる。

(3) 小菅氏の妻君は一人だが、商科大学の學生と云へば一人ではない、大勢ゐるわけ、依て *Li estas studento de Komerca Universitato* のときは聞き手は聞いても、兎に角商科大学學生中の一人と云ふことしかわからぬ、依て此の文では條件 (c) が缺けてゐるから特定でなく不定である。然しもし『彼が昨日貴君にお話して置いた商科大学のあの學生です』と云ふ場合は前以て話してあるのだから聞き手は『あゝその學生か』とわかるのであるから條件 (c) に當てはまり *la* をつけねばならぬ：

*Li estas la studento de Komerca Universitato, pri kiu mi parolis al vi hieraŭ.*

尙ほ御質問の末段『*li* の時は不定で *studento* の時は特定』は主旨不明。

★*Sed* と *tamen* の差違を用例を多く挙げ説明を。〔榊静重, S. K. 生兩氏〕

〔答〕 *sed* は接續詞, *tamen* は副詞的助辭。然し *tamen* も前行の話を受けるのであるからその意味に於ては接續詞の如くだが必ずしも後續文の文首に置かず、文句中に挿入してよい。又意味をつよめるため……, *sed tamen* と重ね



て用ひられることもある。即ち *sed* は前行の文を受け『……である、が然し乍ら』と次の文首に置いて二文を接續する。*Tamen* は前掲の話を受けて『とは云ふものゝ、さり乍ら』と次の文中に挿んで副詞的に用ひられる（勿論文頭に出してもかまはぬ）。*Sed* は英語の *but* に當り、*tamen* は *however, nevertheless, yet*.

*Mi zorgas pri ŝi tiel, kiel mi zorgas pri mi mem; sed ŝi mem tute ne zorgas pri si.* (FK. 5)

私は彼女のことを我が身の様に心配してやつてゐるのに彼女はまるで自分のことをかまはぬ。

*Por ĉiu tago mi ricevas kvin frankojn, sed por la hodiaŭa tago mi ricevis duoblan pagon.* (FK. 3)

毎日私は五フラン貰ふのですが今日は二倍支拂を貰つた。

*Anstataŭ kafo li donis al mi teon kun sukero, sed sen kremo.* (FK. 7)

コーヒーをくれる代りに砂糖を入れた茶をくれた、然しクリームは入れてくれなかつた。

... *Tiam ni povas uzi la komunan prepozicion „je“. Sed estas bone uzadi la vorton „je“ kiel eble pli malofte.* (FK. 9)

然る場合普般的前置詞 „je“ を用ひてよい。然し乍ら „je“ なる語は出来るだけ使はぬようにするがよい。

〔注意〕 *sed* は前行の文に對して次の文がその反對又はちがつたことを云ふことを表示する接續詞で、その前には普通、又は；が置かれ、又時に前文を．で切り之に續行させる。

*Mi ne scias la lingvon hispanan, sed per helpo de vortaro mi tamen komprenis vian leteron.* (FK. 13)

私は西班牙語を知らぬが (*sed*) 字引を引いて兎に角 (= さり乍ら *tamen*) 君の手紙が少しわかつた。

〔註〕 此の文で *sed* は前行の文へ接續する役、接續詞である、然るに *tamen* は『(知らぬが)さり乍ら、兎に角』と文中に挿入した副詞的助辭。丁度 *sed* を更にあらためて強めてゐる。

*Vi tion scias, kaj tamen vi per ĉiuj fortoj penas senkreditigi nin en la okuloj de la mondo.* (OV. 382).

卿等は此の事を知つてゐる、しかもそれなのに世間の眼前に於て吾等にけちをつけんとつとめてゐるのだ。

〔注意〕 茲に *kaj* は兩文を接續する接續詞で、*tamen* は別に挿入した副詞的助辭。丁度 *kaj tamen = sed* の意味となる。此等の例を以て見ても *tamen* は意味に於てこそ *sed* と同義で接續詞であるが語序文法の上からは之を接續詞とせず、副詞的助辭の中に分類するのが穩當なことがわからう。

*Se vi deziras skribi, ekzemple, al iu hispano, sed nek vi scias lian lingvon, nek li vian, vi povas tamen kuraĝe skribi al li (en Esperanto).* (FK. 252)

例へば誰か西班牙人に手紙を書きたいが然し貴君は彼の國語を、彼は貴君の國語を知らぬとする、けれど (*tamen*) 君はかまはずに書く事が出来る。Se, *sed* は接續詞故文首に；*tamen* は副詞的助辭故文中に置いてかまわぬ。然し文首に置いて勿論それはかまはぬ：

*Li estas tre kolerema; tamen li ne portas longe la koleron.* (FK. 17)

彼は怒りつばいが然し (*tamen = kaj tamen*) 怒を長く抱いてゐない。



## Parola Metodo の話 (3)

岩下順太郎

### 音に對するもの

音に對するものは意義である。これから音と意義との關係を取扱つて行くのであるが先づ音と意義との單位から取扱つて行かう。音と意義とは丁度紙の表裏の様なものである。音なくして意義は考へられないし、又意義なくして音は考へられない。この二つの要素の結合した所に生きた言語が呼吸してゐるのであるから言語の教授に於てもこの二つの要素は全く同時に取扱はれなくてはならない。この二つを分離して取扱ふことは教授の便宜上ではあるが、この際には言語を生きたものとして取扱はうとする企ては斷念されなくてはならない。從來の教授法がこゝに於ても分析的であり意義偏重であることは何人の目にも明かであると思ふ。Parola metodo は之に對して音と意義とを分離すべからざるものとして取扱つて行くのである。

前に述べた様に音は實際に於ては決して單音の形で表れて來ない、必ず連音として表れて來るのである。この連續せる單音が意義を持つて來る最小の限度は vorto であるが vorto は實際に於ては單獨に何等の實際的働きも爲し得ない。従つてその vorto に託されて來る意義も亦實際の言葉としては確定に至らない。何故ならば一つのまとまつた思想を表現するに至らないからである。vorto が集つて有機的に結合され frazo の形となつて始めて一つの思想が表現される。それ故思想の言語的單位は frazo であると言へる。Frazo こそは生きた言語の

生命の單位である。Frazo にあつて始めて各語の音も意義も確定した部署に就くのであるから言語の取扱ひは frazo を單位として行かなくてはならない。この時に始めて言語の教授は言語一般の基礎問題に觸れられるのである。この frazo の中に音の一單位、思想の一單位を見て行かうとするのが parola metodo の立場である。この單位を更に分解して説明し得ることは單語、單音の問題のみであつて言語それ自身の問題ではない。目的は言語それ自身にあるのだといふことは教授者の一日も忘れてはならないことである。

既に音と意義とは分離すべからざるものであると言つたが、それは frazo といふ形態に於て見るときその音の一流れと之に對する思想との關係の緊密なことが更に明瞭になる。何故ならば一つの思想に對應して音の流れの受けた modifo はその frazo の分解に依つて消えてしまふからである。Frazo を通じて始めて音と意義との關係は完全に不分離なものになるのであつて、この有機的な關係を最も實踐的に學習者の耳に習慣づけ、了解させなくてはならないのである。之を言ひ換へれば一つの frazo を單位として一連の音から同時に一つのまとまつた思想を反射的に了解する様に訓練することである。

### 音は耳から、事實は眼から

個々の單語の分析的解釋でなく一つの frazo 全體としての思想を反射的に了解



する様な訓練が必要なのだが、抽象的な音のみから學習者にその結果を期待することは出来ない。何等かの媒介的説明が必要である。茲に於て譯といふ問題が出て来る。併し勿論この母國語を中介とし一應之に還元する方法は言語の一段的了解を害するのであつて、言語の基礎問題に觸れるべき時に於て徒に正確癖と分析癖とを養ふに過ぎない。言語教育の第一歩は正確よりも大體の方がより重要である。所で譯が了解の媒介として不適當だとすれば、何がより適當なのであらうか。それは事實である。

吾々の一般的言語生活は多かれ少かれ事實の表現である。高度の思想は抽象的な事實になるが、そういふ事柄は言語の初歩教育と關係も少いし又言語そのものから言つても言語と最も本質的な關係のあるのは吾々の日常生活の事實である。そこで吾々の言語訓練の最初は一つの実事を如何に表現するか、又その音的の表現に依つて如何なる事實を了解するかにある。事實は言語を超越してゐる。日本語で表現され様と Esperanto で話され様と事實そのものには變りがない。それ故、明かな具體的な客觀的な、事實であつて、それが眼前にあるならば、そして一方その事實に對應する、外國語の表現が與へられるならば、それは何等の母國語への還元も説明の中介も必要なく了解される筈である。音に對するものとしての意義はかうして全く事實の中に隠れてしまふのである。そして一方は耳から一方は眼から——學習者はこの二つの感覺を言語として結合すればよいのである。こゝではすべての説明や媒介は不必要であり、母國語への還元の努力及び母國語そのものゝ影響さへ次第に清算されて、

學習者は實感の言語、生活の言語の中に學習の第一日から飛込むことが出来る。眼前にある事實から表現の内容を捕へることは全く努力を必要としないから、學習者の注意は音に集中されることになる。而してこの音は常に眼前の客觀的事實と同時に結合され了解されるのであるから、音と意義とはこの事實を通じて不可分なものとなる。こゝに於て言語は實感と結付き生きた言語として教へられるのである。又かうした訓練の中から言語一般に對する知識の基礎が與へられるのである。この訓練の後にはたとへ眼前の事實が取去られたとしても、その事實に對應する音が聞かれた場合には直ちにその事實を眼前に髣髴させる様になり又之と反對に一定の事實に對しては自然にその事實に對應する音を耳の内に reprodukti する。實感的に言語を取扱ふとはかういふことを目差してゐるので、之を私は聽覺の視覺化又は視覺の聽覺化と呼ぶことが出来ると思ふ。教授法の大きい問題は初歩の部分にあるのでその部分に於ては視覺的な vortoj が選ばれるから視覺と言つたのであるが實際には更に廣く解釋されてよいのである。結局言語の習得は個々の事實を読む練習であり、この練習の集積の間に言語を支配する方則は次第に感得されて來るのである。この感得の上に他日の學問的な分析が準備されるのであつて、この感得はそれ自身では漠然たるものであつても、それが言語の基礎問題に觸れてゐる點とそれが學習者自身の發見である點に依つて貴重である。

事實こそ parola metodo の教科書である。



# 和 文 エ ス 譯 添 削

多 羅 尾 一 郎

1) 或日彼女はもう此以上自分の好奇心を抑へて居る事が出来なくなつた。「汽車に乗つて何處へ行つたの？」と彼女は何げない様子で話を切り出した。

或日は *en iu tago, iun tagon* 其他よりは、*unu tagon* がよい。もう此以上は *plu, plue* だけでなく、もうの意味 *jam* を入れる方がよい。*plu* の代りに *plie, pli* などは勿論不適當だ。少しは今迄でも好奇心を抑へてたが、此れ以上の度合に於てはもうだめだ、と云ふのならば *plie* (おまけに) の意味でよいかも知れないが。好奇心は *scivolemo*。此は大體お書きの様でした。抑へて居るには *kontroli, subpremi, (sin) deteni, fariĝi ne tolerebla, regi* 等々ありました。*subpremi, deteni* は *transitiva verbo* だから *sian* (勿論 *ĝian* にあらず) *scivolemon* と *objekto-vorto* が必要、*sindeteni* ならば *de sia* (又は *la*) *scivolemo* とするがよし。*sin deteni* *sian scivolemon* は今一度考へ直す必要がある。汽車に乗つては *rajdante la vagonaron* とか *prenante vagonaron* は下手だ。*per vagonaro* がよい。*prenante* 等はもう *per* の中に含まれて居るのである。何げない様子は實に様々なる譯がありました。此處が多分一番六ツかしいのでせう。*ĝajnigante senintence, kun senintenca aspekto* とか *ĝajnigi* と *senintence* の二單語を使つた人が實に多かつた。然し、兩方とも何だか日本語のお米臭い處がある様だ。何げないは *indiferenta* を用ふのが一番よ

いと思ふ。様子では *kun* を使つた人が五、六人あつた。良い單語である。*kun indiferenta aspekto* など非常に上手である。*afekti* と云ふ語も面白い。*afektante senintence* は少し如何か？*afektante indiferecon* は良いでせう。

1) *Unu tagon ĝi jam ne povis plu deteni sian scivolemon. "Kien vi do veturis per vagonaro?" ĝi ekdemandis kun indiferenta aspekto.*

2) 何と此世の人とも覚えぬ美人では御座らぬか。

先づ御座らぬかから片附けよう。*Ĉu ne?* と反語を文章の最後に持つて來たのが大部分であつた。次の何とと云ふのを *Kia...!* と云ふ換りに *Ĉu ne vere?* と云ふ反語の *frazeto* を文章の最初に持つて來て、次に *ke* を用ひるとうまく行く、と思ふ。*Ĉu ne vere, ke...?* の如し。此方が日本文の *nuanco* がよりよく出て居り、又より忠實だらうと思ふ。此世のは *tiu ĉi mondo* も結構、誰か *reala mondo* とお書きでした。此を使ひませう。*reala* は現實のの意で、*tiu ĉi mondo* にも當に成らぬ朦朧なる物多き故。とも覚えぬは *tute ekstermonda, ja malofte trovebla* (*videbla* よりはずつと良い) *diine beleca, kvazaŭangela, elveninta el ĉielo* (羽衣の天人の如き) 等いや實に千差萬別、良いのを取り出すに苦心した。皆一應もつともだが、此處に *neimagebla* と云ふ單語を使つたのがたゞ一つある。非常に良い。上記に示



した多くの云ひ廻しより忠實に日本語を寫す事が出来ると思ふ。美人は *bela* でも *belulino* でも使ひ様でよし。*belegulino*, *ĉielanino* は少し變だ。*nimfo* なんて詩的ですね。*alia mondo* は此世とも覺えぬの積りだらうが、工合悪し。幽冥界の美人の意味で原文はさうではなからうから。

2) *Ĉu ne vere, ke ŝi aspektas supernature bela neimageble en reala mondo?*

3) 一見した處では其事件は單純な様ですが。

此問題は割合にやさしかつたらしい。

良い答案で直す必要がなかつたのが七つ八つあつた。一見した處では *unuavide* と云ふ歴然たる *kunmetita vorto* がある。七人の方が此をお使ひでした。*vide* の代りに *rigardo* や *observ(eto)* は *vortenhavo* を考へて下さい。兩方とも念を入れて見る意味ですからね。*supraĵe, je nur momenta vido* など色々ありましたが、上記 *unuavide* が一番よし。事件は *afero* がよい。*okaz(int)aĵo* 等は何んだか單語其物が鹿爪らしく聞えないだらうか? 單純は *simpla* でよし。*facila* は *facile solvebla* などと使へないでもないが使はずに置かう。様ですがのがは譯す必要がない。文章の終りに *komo* を付けて... *simpla, sed* ... は忠實すぎて、反對に悪し。様ですは大體に於て *ŝajnas* を使はれて居る。中でも *ŝajnas al mi* が多い。*legitima* な使ひ方だ。但し *La afero ŝajnas al mi esti simpla* と書かれた時に *esti* なる語は不必要と存する。誤とは云へないが。其理由は *simpla* は *afero* なる語と同等である。即ち補語で、*ŝajnas al mi*

は状態を表す動詞句であるから。*afero* = *simpla* で、此=が *ŝajnas al mi* なのである。*ŝajnas la aferon* なんて云ふのは無茶だ。*aspektas* も良いでせう。

3) *Unuavide la afero aspektas tre simpla.*

4) 随分騒ぐのね。赤ん坊が眼を覺ましますよ。

随分騒ぐのね、騒ぐは *bru'* を使ふとする。殆どの方も使はれたから。但し使ひ方だ。原文に忠實に、*Kian bruon vi faras!* や此に近い *esprimo* が多かつた。しかしのねが終りにあるから、完全なる文章 (*subjekto* と *predikato* の備はつたのをかく稱す) にせず感歎不完全文にしたら如何? 即ち *Kia bruado!* だけではどうです。*Kia bruo!* と云ふのを臺北と静岡の方が書て居られた。他の *esprimo* より良いが *bruado* とした方が原文中の随分がうまく出て居ないか知ら。此文中に隠れて居る *subjekto* は次の文中に書けばよい。さうでなければ、その時の *cirkonstanco* で *vi* を云はなくてもお互ひに、わかるのである。赤ん坊は *infaneto* で結構。*suĉinfano* なんかは用ひぬがよし。大體人間の階程には *maljunulo*, *matura homo*, *infano*, *suĉinfano* なんて科學的見地より見てる様で困る。眼をさますは *vekiĝi*。此は皆さんお使ひでした。さて終りのよだ。別に譯さなくてもよいが、ほつておいて寢醒の悪い人は後方に *ĉu ne?* でもお附けなさい。*Sciu ke li vekigōs* は知らず赤ん坊、これまた眼をさますんものを、なんて云ふ事になりはせないか知ら。

4) *Kia bruado! Infaneto ja vekigōs!*

5) 兎に角ね、君に告白する事は僕の



心を少しでも軽くする事なんだから。聞いて呉れ給へ、頼むから。

原文は長いが、だらだらした文だから譯したら短くなるでせう。兎に角ねのねは不必要、*ĉiuokaze* (*ĉiaokaze* でもよい)、*antaŭ ĉio* 等がよい。但し *antaŭ ĉio* は何はともあれと云ふ積りである。*en ĉiu okazo* もよいが、*kunmeti* するがよい。*Kio ajn okazu*, はえゝいまゝよで少しあたらす。不思議に *iel(e)* を使つた人が四人あつた。此れでは意味をなさず。も少ししらべる必要あり。*malgraŭ ĉio* も變だ。困難は山とあつたのだがてな事になる。君に告白する事はが文章の主部になる。*Konfeso al vi* より *Konfesi al vi* がよい。*Konfesu al vi* は、君に告白するんだが、になりて次の文句に續きが悪くなる。ちよつとしやれた云方だが。心を軽くするには *trankviligi, konsoli, malpezigi, faciligi* (*la koron*) と云ふのが多かつた。*faciligi* は心をうきうきさせる積りだらうが、どうですか? *facilanima knabino* なんて云ひますがね。他は皆もつととも、うなづかされる言葉。*konsoli* は石黒氏がお使ひになつて居た。*malpezigi* は軽くすの *laŭvorta traduko* 偶然にも *anglismo* には適中して居る。*Stranga Heredaĵo* 中にも使用されて居る。僕には悪いとは云へない單語。少しでもは *iom, malgraŭ iom, kvankam iom, eĉ iom* 等世は様々。然し *iom* だけは皆共通。*iom ajn* が二つあつたが、何の事か? *almenaŭ* もよい。残りは至極たやすい。

5) *Ĉiaokaze konfesi al vi almenaŭ iom malpezigos al mi la koron. Bonvole aŭskultu, mi petas.*

6) 静かに、熱い涙が止めどもなく頬

を傳ひました。

*Kviete* が一番多く使用されたが、僕は *silente* が *plibelona* だと思ふ。*trankvile* は *sen timo* な四海波たゝすだ。故に静かには *silente* にする。*larmo* は必ず複數にぼたぼただから *larmoj*. 止めどもなくは *senĉese* 又は *senfine* が多かつた。*dum longe* などは實にまづい。*sinsekve* などはよからう。頬を傳ふは *flui sur la vango* がよし。*fali laŭ la vangoj* などよく見受けたがまづい。

6) *Silente, sinsekvantaj varmaj larmoj fluis sur ŝiaj vangoj.*

成績:—86 木原氏、79 Lageto 氏、荒木熊雄氏、77 山縣氏、石本氏、76 柳田氏、75 イシダ氏、74 T. 柳田氏、73 Krosaŭa 氏、Fukajo 氏、72 石生氏、70 黒木氏、以下略。

## 九月號課題

(締切七月末)

- 1) えゝ氣のもめる事ぢや。だがそちは、あまり氣にせぬがよいぞ。
- 2) 指揮者の棒を合圖にオーケストラは愈々始まつた。
- 3) 一體何んの權利があつて俺の私室に貴様は這入つたのだ。
- 4) えゝどうともなれ、もうやぶれかぶれた。
- 5) 『俺の命もこゝ數日だ。それで——』病人は終りまで云ひきる力さえもうなかつた。

## 六月號重要正誤

頁	欄	行	誤	正
204	右	-8	En	Ĉiu
205	左	-5	premio	premisio
"	右	-16	ascio	asocio
206	右	10	geale	egale
217	右	16	komplimento	komplemento
219	左	3	の種類	の7種類



# 文 法 研 究 課 題

文法語法の研究を一般の人から募集したらどうだと云ふ提案があつた。諸家の文法語法の研究は在來も常に歓迎して本誌に發表してゐたのであるが、場合によつたら一般會員に問題を提供して研究して貰ふことも會員の學習研究に資する所大であることと思ふ。最もよき論文に對して粗賞を呈することとする。(同一程度の者多數の節は抽籤)。

## 第一回課題

Sur la kameno inter du potoj  
staras fera kaldrono.

[251 頁より續く]

uzos neoportunajn. Kaj ne povos volonte obei al la plejmulto. Supreskribita estus bezona por la konsiderado de lingva problemo kiel metodo. Tio, kio estas kontraŭ tia fluo, estus nulo kaj vana. Ho, genia estas Zamenhofa principo! Li estas vivisekcanto, ĉar li traktas vivantaĵon!

S-ino Marie Hankel rakontas ke ŝi tre ofte ricevis de li respondojn. “Vi povas uzi ambaŭ esprimojn, ambaŭ estas ĝustaj.” kiam ŝi al li demandis. Kial? Eble tiel, ke li jam profunde konas naturan iradon de la lingvo. Ŝi rakontas. “Li (Zamenhof) opinias, ke malbonaj kaj ne taŭgaj vortoj (ankaŭ formoj) baldaŭ malaperos, nur la bonaj restos.” Li ne forigis tiun aŭ alian por ambaŭ ebloj. Ke Esperanto estu ellaborlita, kon-

〔問題〕 この例文中の kameno, potoj, kaldrono の關係位置はどうか(即ち kameno は potoj の間にあるのか、potoj が kameno の上にのつてゐるのか或は下にあるのか)。それに對して文法的に解釋論斷すること。

〔締切〕 七月末日迄。

〔書方〕 簡單明瞭 (koncize) に論述すること (横書き二十字詰、六十行以内)。

〔注意〕 本例文の出所は Fundamenta Krestomatio, 7 頁 19 行; 又は Fundamento de Esperanto, 60 頁 5 行。

stante “riĉiĝadu” kaj “perfektiĝadu” sur la Fundamento. Ĝi floru sur ĝi. Li estas la unua, kiu formulis en la formo de principo tion, ke se troviĝas neoportunaj formoj, kun la paso de tempo novaj uzataj elpuŝos malnovajn, kiuj estas arĥaikigindaj, post paralela ekzisto kun ili. Sen rompo kaj sen forigo!

Li konsideras ankaŭ “lingvosenton,” “lingvokutimon” kaj “kompreneblecon” ktp. ktp., kiuj estas ankaŭ “ĉefaj mezuriloj uzendaj ĉe la esploro de la lingva problemo” — vortoj de D-ro Lippmann.

Kaj estas necese ke ni akriĝu ĉiujn mezurilojn, antaŭ ol fari esploron pri la problemo. Ni klinos la kapon antaŭ la kompetentaj de Zamenhof. Kaj kiel trafas la veron liaj vortoj!

En sekvanta okazo ni serĉos en Lingvaj Respondoj kaŝatajn trezorojn kiuj neniam estos elkonsumeblaj.



# 處 變 則 品 變

K. Ossaka.

## 6. 「只 今」

子供が朝カバンを肩にして『行つて参ります』; 母親:『行つていらつしやい』。午後子供が學校から歸つてくる『只今』; 母親『お歸りなさい』。

これは西洋にない挨拶だから譯しやうがない。子供はだまつてかけ出すだらうし、歸つてくれば母親はキツス一つで事はすむから挨拶はいらぬ。尤もあるフランスの Esp. 教科書に子供が母親に *Gisla revido!* と云つて學校に行く處が書いてあつた。又 *Rabistoj*, p. 90 に *Adiaŭ!* がある。或は時に *Mi nun iras* (もう行きます) と云ふ場合もあらう。『行つてらつしやい』も *Iru kun Dio!* (神と共に行け、無事で行つておいで) も時に使へようが學校へ行くのには少し大げさだ。『只今』『お歸り』に至つては適當な譯はあるまい。或る獨逸の Esp-isto に獨逸の子供は何と云ふかと聞いたら、さあ別に云ひ方はあるまいが、先づたいていの子ならいきなり走り込んで來て „*Panjo, mi estas malsatega!*“ 成程世界の子供に共通だらう。

## 7. 「あぶない」

日本人が英國を旅行中汽車の窓から顔を出して景色を見ようとすると近くの人が *Look out!* と叫んだのでさては何かあるかと頭を窓からつき出したら柱にぶつかつて大怪我をしたと云ふ笑ひ話。

勿論 Esp. で此の場合『あぶない』は英語を直譯した *Elrigardu!* ではない、

*Atenton!* と云ふべきである。(佛語 *Attention!* 獨語 *Achtung!*) 人ごみを材木をかついで歩きながら『どいたどいた』も *Atenton, atenton!*

電車の人ごみをわけて『ごめん下さい』は *Pardonu* 又は *Pardonu min!* 人の足をふんだ時も同様 *Volu pardoni! Mi petas vian pardonon!*

外國人と話をする時相手が話しを切らぬ内に口を出すことは嚴禁である。せつかな議論すきな日本人は兎角この *interrompi* を思はずやりたがるが、非常な無作法である。拍子で二人が同時に口を切つた場合にはすぐ *pardonu!* と云つて中止すべきである(従つて二人ともだまつてしまふことになることもあるが、一瞬時でも先へ口を切つた方へ話をゆする)。

人の云つたことがわからずも一度云ひかへして貰ふ場合 *Kio? 『なに?』* はぶしつけ過ぎる。*Mi petas?* (獨逸語で *Ich bitte*) とか *Pardonu?* (英語 *I beg your pardon*) とか云ふべきである。但しわからぬのをきくのであるから *Mi petas* も *Pardonu* も口調は疑問文のときのやうに尻上りに發音すること。

便所へでも行く時、まさか *Atendu, ĉar mi iras urini!* とは云へない。矢張り *Pardonu!* とか, *Momenton, mi petas!* とか云ふ。人を待たせるため『一寸お待ちを』も同様 *Momenton, mi petas.*

人に物を尋ねる時『あの一寸』も *Pardonu min, ĉu vi povas diri, kie loĝas S-ro Hamada?* などとやる。



# ESPERANTAJ LIBROJ RECENZO

新刊紹介

★FABELOJ, ANDERSEN, Tria Parto, trad. D-ro L. L. Zamenhof; eld. Esp-ista Centra Librejo, Paris; 15.5×21 cm., 153 p.; 定價 1 圓 1 錢 (送料 4 錢); 學會に在庫あり。

Esp. の語法學の建設は 生きた文獻の研究によつて達成せらるべきもので、ことに Z 博士の筆に成るものは、吾人に規準を與へるものである。本書は博士未發表の遺稿として吾人が待ちに待つてゐた、アンデルセンお伽噺第三卷。お伽噺であるから高級研究者 Esperantologoj 連のみならず初學者にも好箇の讀み物で、中等講習會にも向く、要するにいやしくも Esp. を研究する人の必讀書に此の一冊が加はつたわけである。

Jen volumo longe kaj avide atendita de la Esp.-studantoj. Kun bedaŭro ni tamen rimarkas, ke al tiu ĉi volumo ankaŭ ne mankas presdifektoj same kiel al la du jam eldonitaj partoj: sameemalfli ĉa! (p. 5/linio 4), viri aj noktuj (5/5), maskarado (34/2; en 148/25: maskerado), tie (anstataŭ tiel, 39/7), metata (metataj, 46/1), koran (koran, 60/19), kententiga (79/10), maltriĉa (95/9), kio (kion, 95/23), multaj da aferoj (113/29), alpenzon (el'penzon, 115/12), j'en (130/16), naj (130/23), Ĝi puŝis si (134/24), pantolonoj (139/12), longue (143/30), trop (144/19), najtingalon (n nebezono, 145/15), tula (147/37) (Ni ne citas malpli gravajn, tuj ekkoneblajn preserarojn, ekz. esta, nfano, kun kreskiĝis, k. s.). La ĉeesto de multaj preseraroj kondukus la studantojn de la „Esperantologio“ al la konfuzo, ekzemple ĉe la renkonto de la jenaj frazoj ni devus jam dubi, ĉu ili estas vere el la plumo Zamenhofa aŭ simplaj preseraroj nezorgitaj: sia (en ununombro) bonodoro, formo kaj koloroj (24/3), asperolo (29/11; en 133/31: asperulo; fakte ĝis nun ambaŭ formoj

uzitaj, sed tre dubinde, ke ili troviĝas ĉe unu aŭ'oro), dekstremano (83/20, ĝisnuna Zamenhofa kutimo: dekstramano; cetere en 84/6: dekstra mano), Be! (97/32; He aŭ Ve?), pesipelvo (140/3; ĉu pesilpelvo aŭ pes-i-pelvo? Kp: pesiltaso, Biblio 551/d. 10). Ĉar ĉiu verko Zamenhofa donas al ni norman bazon por la lingva studo, ni petas, ke oni kun konscia zorgemeco atentu en la presado de Zamenhofaĵo! [K. Ossaka]

★UNUA LEGOLIBRO, de SAT, eld. SAT, Paris, 1932, 12×17 cm., p. prez. 1 marko.

編者 N. Bartelmes 曰く「此の新讀本は初歩を終つた者、及び研究會等の講習に最も適した讀物を集録した。配列は決して易より難への rigora maniero によつてゐない。……rakontoj の大部分は SAT-gazeto の La LERNANTO の最近數年間に既に出たもの。」と。全篇を分つて、I Anekdotoj, II Pensigaj Rakontetoj, III Paĝoj de l' Rido, IV La Lingvo k. ĝia Vivo, V Priskriboj, VI La Scienco k. la Instruo, の六篇とする。本文の各 rakonto は全部半頁乃至 1-2 頁の短篇。挿畫 30 餘。活字が手頃で本文註共にガッチリ詰つて、一見直ちに内容の異常な豊富さを示し、新鮮味が紙面に溢れて恐ろしく讀書欲をそゝる。内容は上記の enhavo の示す如く色々だが、機智に富むもの、理論的なものもあり、その中の一篇進藤静太郎氏の Ĉu eŭropanoj lernas esp. korekte? は筆者ばかりでなく、日本の同志の痛感してをるところを trafi して思はず手を拍かしめる。各 rakonto 皆異つた人ので、夫々の stilo を持ち之に編者が一篇毎に細かい活字で註を esp. で加へてゐる。選ばれた本文の所々 Drezen に輪をかけた様な、我武者羅な使ひ方をしてゐるのは兎に角、編者までが之を支持してゐるのはどうかと思はれる。その一例、saĝo, facilo, simpla (之等は eco を供ふ必要なし) p. 13. ajnan=iun ajn p. 28, sekvinta,—onta (laŭ la pozicio, el kiu oni rigardas al la okazoj) p.69) 然し此の註の面白味は、ある點では單なる註釋に止めず一かどの Lingva demando を取り上げて、日本の Esp-istoj なら慎重な態度をとる所を勇敢にドシドシ斷定してゐることである。だから本書を輪講、研究會等で使ふ場合可成上達した gvidanto がゐないと、蜂の巣を壊わすとまでは行かなくても、相當の混亂をまき起す可能性が潜んでゐる。然し優れた gvidanto が之を正しく批



判して與へたら反つて lernanto の批判力を養成するに役立つだらう。そして最後に編者の所謂 „perfektaĵoj“ esp-istoj が獨りでその内容の豊富さ、新鮮味、面白さに牽かれ lingvo といふ土俵の上で、此の本と相撲をとる氣で讀んだら、恐らくこいつは面白いと手離せなくなること受合ひの讀物である。[S. Okonogi]

★SUBMARINISTOJ, de Novikov-Priboj, trad. de E. Blinov, eld. EKRELO, Leipzig, 1932; 12×17 cm., 115 p. 定價 90 錢 (送料 2 錢)。

原著者は 1877 年に生れ日露戰爭に参加した。そして日本海の大海戰 (1905) を材料として書いた最初の著述に相次いで數ヶの maraĵ rakontoj を出したが、革命的内容の爲 Caro 治下にあつて彈壓され、10 月革命後急にその名聲をロシア文壇に獲得した。本書も同戰爭中の潜水艇員の生活が敘述されてゐる。全篇に動く人物は悉く彼の k maradoj で、その生活が物語的に詳しく描き出されてをり、最後に彼等が艇の沈没から九死に一生を奇蹟的に得る。譯文は Drezen が kontroli したとあるが、人も知る如く D. も随分思ひ切つた使ひ方をするから、必ずしも安心出來ぬ。譯筆生硬、可成讀み悪い。吾々はかうした E.p. を讀む毎に痛切に感ずるのは如何に Z. menhof の文章がよく書かれてあるかという事である。本書は海的生活 (特に潜水艇) の専門語が澤山出て来るから此の方面に興味を持つ人が之等を参考として語彙を集めたら面白いと思ふ。(學會に在庫) [S. Okonogi]

★ŜTALA BIBLIO de SAMURAJISMO (武士道刀劍鑑), de Kijohiko Cujuki, eld. Japania Esperanto-Instituto, 1932: 12×16 cm., 21p.; broŝ., prez. 15 sen, poŝt. 2 sen.

La prezentendaj en la tutan mondon kiel “plej japanmanieraj” estas Noo kaj Japania Ŝtalo. En iliaj silenteco kiel fundo de puto, pompeco kiel diverskoloraj floroj en ventego, kaj profundeco kasiĝanta sub simpla fazo, ni povas klare vidi Japanan Animon kaj Samurajismon. Kiu parolas Japanan Animon kaj Samurajismon nepre devas havi profundan scion pri Noo kaj Japania Ŝtalo. Jene nove eldonita tiu ĉi libro ŝiĝos al vi la ĉirkaŭaĵon de la lasta. Kvankam la paĝoj estas malmultaj, sekve la enhavaĵo ankaŭ estas iom tro simpla, tamen oni povas sciigi “kio estas Japania Ŝtalo.”

En nuna tempo, kiam ankoraŭ ne aperis

libroj pri tia temo en la Esperantujo, ĵeti tiun ĉi en la mondon signifas unu pafon de la serbo por sciencistoj en nia grupo.

[J. Onoda]

★SUPERA KURSO de ESPERANTO, de D-ro Leopold Dreher, eld. P. aŭtoro, 1932; 12×16 cm., 66 p.; broŝ. prez. 1.25 sv. fr.

ポーランドに其の人在りと知られたる Leopold Dreher 氏の著であるから、其の點先づ安心である。今日世界に入門書は多いが、高等文法書と目されるもの、然も其の手頃なものに至つては、實に曉天の星の如くである。此の時に當り、本書の如き小よく要を得た書物の出現は、エス語研究者に對しては其の勇氣と興味を倍加せしめ、エス語教育家にとつては、砂漠にオアシスを見出したるの感あらしめるであらう。ザメンホフ其他の模範長文が掲げられ高等文法的語法解説が施されてある。試みに内容の二三を紹介すれば。

Pri- kiel prefikso.

Prilabori=labori pri io. Simile: priskribi, prikanti, pripensi. La formo kunmetita (prilabori) estas pli oportuna ol la formo dismetita (labori pri). Oni ne diras: Homero, la skribinto pri la herooĵoj de Odiseo, sed: Homero, la priskribinto de la herooĵoj de Odiseo....

Ripeto de radiko.

...Stile palaj, senkoloraj estas ankaŭ: havi paroladon, havi manĝon, fari demandon (pli bone simple: demandi), estis okazintaĵo, estis pluvo (falis pluvo), havi sukceson (rikolti s.) kaj aliaj „esti“, „havi“ kaj „fari.“ Stilisto laŭeble serĉas pli vivan esprimon internacie kompreneblan.

Ripeto de prepozicio.

Prepozicioj (al, de, en, el, sur, kun ktp.) estas ofte ripetataj en sama frazo en formo de prefikso: eniri en ĉambron, alparoli al iu, surpaŝi sur vojon ktp. Por tion eviti kaj malpli-longigi la frazon, oni diras: eniri la ĉambron, surpaŝi la vojon, alparoli amikon k. s. [J. Onoda]

★TRA SOVAĜA KAMĈATKO, de Sten Bergman, trad. de Birger Gerdman, eld. Eldona Societo Esperanto, Stockholm, Sved., 1932; 14×21 cm. 276 p.; 定價上製 4 圓 30 錢、並製 3 圓 20 錢 (送料上 10 錢、並 8 錢)



# La Kokoso

Poezio de Masao Katô

Trad. K. Sisido



La kokoso, kiu lasis la marbordon for,  
Laŭ la ondoj tramigradas ĝis la mara fin';  
Sub printempa dorma luno en vespera hor',  
Ĝi en sonĝo aŭdas kanton de la marvirin'.

これは 1920-2 年におけるカムチャツカ探險隊員の冬期旅行記である。この探險隊はスウェーデンの各種科学者数名によつて組織されてゐたが、本書は科学上の報告でなく、一隊員が通俗讀物として提供したものである。とはいへ、興味深いうちにも、鐵道を持たぬ、この極東の大半島の、野生のままの姿を、文明世界に紹介する、得難い文献で、かうしたものが、Esp. によつて世界に紹介されることは、まことに適はしいことである。Per Balono al Poluso といひ、本書といひ、有意義な出版をつづけてゆく Eldona Societo Esperanto の態度には敬服させられる。

北日本の港市函館から便乗した、赤色ロシアの監視船が、深夜、暗礁に乘上げて、沈没し、日本の水雷艇隊に救ひ出されるまでの不安な数日間——最初から波瀾に富んでゐて、小説を読むよりも遙かにおもしろい。ことに日本人にとっては、漁場問題を中心として、わが國と密接な關係を持ちながら、ほとんど未知のままな、この土地に就て知ること、決して、興味の無いことではない。

La plej kortuŝe afablaj leteroj で招き、何でも、興味深く目をとめると、ただでくれ、つひに nek kuraĝis rigardi nek montri al io kaj devis ekiri hejmen, por ke li ne donacu al ni la tutan fabrikejon と悲鳴をあげさせた日本人、tro malbonaj maristoj で屢々 „ankras per la kilo“ をやる、そして、何でも „skoro ni nâda“ (estas nenia urĝo) „Niĉevó, patôm“ (ne gravas, poste...) でかたづけてしまふロシア人、数ヶ月前まではカムチャツカといふ名さへ知らなかつたのが、

夫婦喧嘩のあげく上海を飛出して、言葉の通じぬこの異邦に放浪する支那行商人、その他、朝鮮人、ヤクーツ、コルヤツク、アイヌ等々極東諸民族の民族的個性が、隨所に見られることも、特に興味深い。譯は第一流とはいへぬまでも、流暢で、上の部に屬するであらう。

Valora verko. Interesa precipe por ni, azianoj. Sufiĉe lerta traduko. Ni nur bedaŭras trovi vorton „koreano“ anstataŭ „koreo.“ (學會に在庫あり) [Mijake-Ŝ.]

★TRANS LA FABELOCEANO, de Francisko Szilágyi, eld. Literatura Mondo, Budapest. 1932; 13×19.5 cm. 134 p. 定價 2 圓、送料 4 錢。在庫あり。

„Ĉu estis, ĉu ne estis, eble trans la Fabelmaro vivis...“ Per tiu frazo, kiun oni tiel ofte kaj tiel avide aŭskultis en la infaneco, komencas la aŭtoro rakonti siajn belajn fabelojn, tamen, ne al la etaj infanoj, sed al la plenaĝaj buboj. Spirita ironio. Iom da kaŝita sentimentalismo. Serena moderneco, konciza kaj freŝa stilo. Tamen oni absolute ne rekomendu ĝin al la esperantolernantoj, sed nur al la maturaj esperantistoj, ĉar tie kaj tie en la verko troviĝas esprimoj, kiuj miskondukos esperantoinfanojn. Ekzemple: mi skribis *multen*, jees, Ĉu li estas *pli homo*, ol mi? Kompreneble li intence uzis tiajn esprimojn. Eble ili estas uzataj dum ĉiutagaj babladoj, kaj eĉ bezonataj por esprimi infanfabelajn nuancojn. Sed ĉu pro tio li povus eviti diproĉon de la severaj esperantologoj, mi ne povas garantii. [Mijake-Ŝ.]



# DEZERTO

— S. Kōga —

(Daŭrigo)

*Kun la permeso de l' aŭtoro  
trad. S. Minami.*

“Tiu filino estis amata de riĉulo el Tokio, kun kiu ŝi edziniĝis. La nomo de la riĉulo..., ja ĝi estis Jasuhara, se mia memoro min ne trompas.”

Mi estis frapita de lia parolo, kiun mi atente aŭskultis. Ŝajnigante min kvazaŭ foriranta, mi kaŝis min malantaŭ arbeto.

“Baldaŭ ŝi gravediĝis kaj revenis la gepatran domon por naski tie la infanon. Pro maltrankvilo la edzo ankaŭ sekvis ŝin, sian amatan edzinon. Kaj kvankam mi ne bone scias, la edzo ĵaluzis pro tio ke ŝi havis amaton en la vilaĝo aŭ de iu alia kaŭzo. Tiel Jae Iŝii intencis venenmortigi la edzon.”

Mi surpriziĝis. Mi apenaŭ detenis min de krio.

“Ha! Malbeninda virino!”

Ankaŭ la aŭskultanto diris surprizite.

“Kaj ŝi estis juĝita kaj sendita en malliberejon, kie ŝi naskis filinon kaj ŝi baldaŭ poste mortis.”

“Ha!”

“Pro tio kompreneble ŝi estis jure eksedzinigita, pro kio ŝi reprenis la nomon Iŝii. Kaj familianoj ĉiuj mortis kaj sekve nun ne estas multaj, kiu, scias pri tio.”

“Kiel fariĝis tiu filino.”

“Jasuhara prenis la filinon sub sian zorgon. Ŝajnas al mi, ke ŝi nun fariĝis bela fraŭlino.”

Mi ne bezonis aŭskulti plu. Ho, ve!

Jae Iŝii estis la patrino de Itoko, mia edzino. Mia edzino estis en abomeninda malliberejo naskita de la patrino, kiu intencis venenmortigi sian propran edzon.

Mi nun vidis, kial la edzino sopiris veni ĉi tien! Mi iom komprenis, kial mia edzino svenis vidante tiun tomboŝtonon kaj ŝi foriris sen mia permeso.

Kun premita koro mi vagadis en Nagatanino. Ho, ve! La filino de la virino, kiu intencis mortigi la edzon!

Ĉu tiel terura heredo kuŝas en ŝia sango malgraŭ ke ŝi havas tian anĝelan vizaĝon? Ho, ve! Mia sopirata amata edzino, kiu forlasis min.



naskiĝis en tiel malĝojinda cirkonstanco?

Kvazaŭ homo sen celo, mi paŝadis en la vasta dezerto. Antaŭ la vesperiĝo mi revenis la gastejon. Kiam mi estis enironta en la ĉambron, al mi ŝajnis, ke homo estas en la ĉambro. Ĉu la edzino revenis? Ekfrapis mia koro. Sed post momento mi falis en malgajon. Kion mi faru, kiam la edzino revenis? Mi estas ĝoja. Tamen kiel mi faru kun la sekreto pri Jae Isii? Ĉu kiel antaŭe, mi povos min teni indiferente antaŭ ŝi?

Sed la edzino ne estis tie en la ĉambro. Tie mi trovis tute neatendite F-inon Kaneko Tōjama. Vidante min ŝi diris kun mieno fiero pro la venko:

“Frato,—ŝi kutime min nomas tiel—Kie estas fratino Itoko?”

“Kial vi venis ĉi tien?”—Intence ne respondante al ŝia demando, mi severtone ŝin tiel demandis.

“Por venigi vin al la sentoj.” Ŝi trankvile respondis. “Vi malprofitos, se vi havas rilaton kun tia virino.”

“Kiamaniere vi eksciis, ke mi estas ĉi tie?”

“Ha, ha, ha! Vi ja min minacas? Mi estis en Kioto. Mi subaĉetis subulon de detektivo Kimura por ke li tuj sciigu al mi kiam vi ion komunikos al li.”

“Pro kio vi estis en Kioto?”

“Mi venis kun amikino en Kioton. Ankaŭ vi ŝin konas. Mi petis ŝin, ke ŝi rimarkigu al vi en la vagonaro, ĉu ne?”

Ho! Mi surpriziĝis.

“Do, tiu kun la malhelaj okulvitroj...”

“Jes, vi certe vidis ŝin antaŭe ankoraŭ almenaŭ unu aŭ du fojojn. Kompreneble ŝi ne portis la malhelajn okulvitrojn, kiam vi vidis ŝin antaŭe. Vi ne rekonis ŝin en la vagonaro, ĉar vi estis tiel absorbita en Itoko’n.”

“Hm, do vi ankaŭ metis la strangan paperon ĉe la tualetejo.”

“Ne, tion mi ne koncernas. Mi nur petis mian amikinin al vi rimarkigi. Kaj vi nun vidis, ke mi estis ĝuste prava, ĉu ne?”

“Pri kio vi signifas?”

“Pri Itoko. Ĉu vi ne scias? Ŝi estas filino de mortigintino!”

“Kio!”

Senkonscie mi kriegis.

“La subulo de Kimura pri tio informis min. Mi aŭdis, ke Kimura jam enketis pri tio.”

“Ne diru sensencaĵon. Mi volas havi nenion kun vi. Rapide foriru!”

“Ne, mi neniam foriros.”



“Ne diru absurdaĵon!”

“Frato!” Kun sentemeco ŝi rigardis min de malsupre, “Kial vi estas tiel malvarma por mi? Vi neniom min amas! Mi ĉiam nur deziras bonon al vi. Virino, kia estas Itoko, estas malbonkora malgraŭ ke ŝia ekstero estas bela. Mi nur deziras sciigi al vi tion.”

Mi eksentis kompaton al Kaneko. Ŝi ne havas malbonan punkton por menci. Nur ŝia altrudemo ne plaĉas al mi. Ĵaluzo igis ŝin fari senprudentan agon kaj riproĉi Itokon, ĉar ŝi vere amas min.

“Bone, bone! Certe malprave mi vin riproĉis. Mi bone komprenis, kion vi diris. Sed mi ne povas forlasi ŝin tiel. Antaŭ ol mi foriros, mi devas aranĝi bone la aferon. He, do vi foriru antaŭ ol mi.”

Mi komencis kvietigi ŝin.

“Vi ankoraŭ ne povas forgesi ŝin.”

Ŝi ĝemis. “Filinon de mortigintino kaj naskitan en la malliberejo...”

“Ts!” Mi denove kriegis.

De kelkaj minutoj aŭdiĝas ia brueto en la koridoro. La najbara ĉambro ne estis okupita, sed malbone estus, se servistino preterpaŝanta nin subaŭdos.

“Ne parolu per tiel laŭta voĉo.”

Tion dirante mi malfermis paperan glitpordon. Neniu troviĝis tie kaj mi trankviliĝis. Subite mi ekvidis paperon sur la sojlo. Sur ĝi io estis skribita rapideme per krajono.

Nenia dubo, ke ĝi estas skribaĵo de mia edzino. Konfuzite mi prenis ĝin, kaj mi legis:

—“Ĉar mi fariĝis iomete libera, nun mi venis ĉi tien por vin vidi, almenaŭ de la distanco, malgraŭ ke tio estas altrudema konduto. Mi ja sopiregas vin! Sed neatendite Fraŭlino Kaneko estis, kaj mi aŭskultis la interparolon ekstere. Bonvolu pardoni min, mi petas. Ŝajnas, ke vi jam eksciis pri mia situacio, kiun mi tenadis sekreta. Kun malamo eble vi min malestimas. Ekzistas cirkonstancoj kaj pri la cirkonstancoj, kiuj rilatas tion, tamen verŝajne klarigo miaflanka estas vana, do mi tion ne faros. Mi jam rezignas vidi vin! Bonvole zorgu pri via sano, mi petas. Vi agu laŭ la plaĉo de F-ino Kaneko—.”

Legante la leteron mi larmis pro la kompato al mia edzino. Neniun kulpon havas la edzino! Mi akre rigardis Kaneko'n.

“Ĉar vi diris sensencaĵon, Itoko denove foriris, kvankam ŝi revenis. Sentaŭgulino!”

Kaneko tiel grimacis, ke ŝi estis preta ekplori. Ankaŭ Kaneko ne estas kulpa.



Ne povante min deteni de ploro, mi mem fine eklarmis. Ial subite Kaneko ekploregis.

## V

Fikse rigardante la malorde pendantajn tremantajn harojn sur la blanka nuko de Kaneko, kiu plorĝemas, mi eksentis kompaton al ŝi, mia koro tamen estis plene inklininta al mia edzino. Mi nun ekhavis plenan komprenon pri la suspektinda kaj timema sintenado de la edzino. Jae Iŝii, enterigita en tiu abomeninda elfosita tombo, estis ŝia patrino, kiu antaŭ dudek jaroj estis arestita sub la suspekto, ke ŝi intencis venenmortigi la edzon, kaj ŝi naskis ŝin en la malliberejo kaj tuj mortis. Tio estas ja la tuta fakto! Mia edzino timas nur pro tio, ke ŝi estas filino de la patrino, kiu intencis fari teruran krimon. Kompreneble tio estas sufiĉe terura tamen nur pro tio ŝi ja ne bezonas forkuri de sia edzo, kiu amegas ŝin.

Laŭ la postlasita letero mi povas sufiĉe kompreni, ke ŝia amo al mi neniom ŝanĝiĝis. La edzino forkuris ŝajne pro timo, ke ŝia konkurantino, Kaneko malkovros ŝian hontindan devenon. Tiu malgranda makulo de la edzino neniam malvarmigas mian amon! Ju pli hontas la edzino pri si, des pli grandiĝas mia amo al ŝi! Mi devas nepre elserĉi la edzinon, kiun mi devas trankviligi.

Mi kviete meditis. Ŝi povas sin kaŝi nenie krom en la dometo suspektinda de la maljunulino sub la pinarbo en la dezerto! Kiu estas tiu maljunulino? Verŝajne ŝi estas unu el gefriponoj, kiuj bone scias la sekreton de mia edzino, kion profitante ŝi minacas la edzinon. La tombofosisto, kiu estis komisiita forlogi ŝin, ankaŭ devas esti subulo de la maljunulino.

La alia laboristo kun terura vizaĝo estus ilia kamarado. Ili enkarcerigis la edzinon en la izolitan domon en la dezerto kaj ili minacas ŝin. Tamen ĉar mi eksciis ŝian sekreton, tial ilia minaco jam estas vana! Ĉiuokaze mi devas savi la edzinon el iliaj manoj. Forlasinte Kanekon plorantan, mi eliris eksterdomen. Jam tute mallumiĝis. Palpante en la mallumo mi ŝanceliĝe paŝadis la vojon sur kiu mi min direktis en la tago. Mi trairis malglatan vojon inter nikotianaj kampoj, arbareton, vojeton, kiu disduiĝas, kaj kun peno atingis la izolitan domon en la dezerto.

(*Daŭrigota*)



## 海外報道

# EKSTERLANDA KRONIKO

宗 近 眞 澄

## ESPERANTO-HEJMO の横顔

南佛蘭西の Nice から 13 軒、海拔 530 米の Aspremont の山中の一角に、ICK の後援で 30000 平方メートルの地面を劃して、ESPERANTUJO が出現し 9 室を有する新殿堂が建設されて、ESPERANTO-HEJMO と呼ばれ日常 ESPERANTO が使用されて居る。必要に応じて若し財政が許しさえすれば、近接する土地を買入れて領域は幾何でも擴張出来る環境である。

此の ESPERANTUJO の税政たるや誠に注目し得るものがある。即ち自國の住民からは徴収しなくて、國外に資源を得ようと云うのである。理由は建國以來日尙浅いので一切合さい輸入一方で、當局もこれ以上に負擔を加えるに忍びず、住民としても課税の moratorio を切望して居るのである。實に世界的不況は此の樂土をも看過せず、生活難は相當に深刻化して居る模様である。依て當局は外債募集を企圖し、其の案を頻りに練つては居るものの何分利息は當分拂えそうもないと、前以て了解を求める様な窮乏状態であるから、却々埒があかぬのも無理はない。

住民は食事付居住費として一日 30 francaj frankoj の割で拂つて居る。

此の小國は自然の美觀に恵まれて、訪問客の眼を悦ばせて居る。又領域中の區劃を呼ぶにエスペラント人の耳には懐しい亡き先驅者達の名を以てして居るのもよい思ひつきである。即ち Zamenhof, Boulet, Hodler, Mudie, Nakamura, Nutters, Ostrovski, Trompeter 等である。Nakamura と云うのは我が JEI の前理事長中村精男博士の事と思われる。

廣い領域中には果樹が澤山植つて居る。十二種類程のものがあるが、各幹には寄贈者の名を書き入れた札がさがつて居る。若し此の

庭園内に誰かの名を留めたいと御希望の向は、10 f. frankoj を此の ESPERANTO-HEJMO に寄贈されるなら、適宜に苗木を買い求めて例の様な札を附して、永く御芳志を記念するとの事。

果實が熟する頃ともなれば此の國の客は、庭に下り立ち自ら美果を樹上に求めて、えも云われぬ其の美味を賞すると共に、ESPERANTO 特有の新鮮味をも満喫する事が出来よう。其の景觀を想見する時、食べ頃の魅惑的な色彩を有つた或は櫻の實が、或は無花果が筆者の眼前を去來して口中頻りに唾の湧くを覚える。

此の國に客となる者は、ESPERANTO-HEJMO の設備完成の一助として、幾何かの金額を寄附し所謂 dankinda servo をなす不文律がある。但し御本人には不用で、而も此の HEJMO には必要な寄贈品持参者は此の限りでないとの事。

尙此の HEJMO では品物は何でも有り難く頂戴するとの事であるが、郵便や汽車便で運賃着拂の荷物の御寄贈は今暫らく御勘辨願いたいと云つて居る。と云うのは前述の様に窮乏の折柄其の送料支拂に對しては、到底財源を見附ける事が出来ず、結局一大恐慌を來す虞れがあるからである。

## 大東京に „ESPERANTO“ 町

Katalunujo の首府 Barcelono 市の新町名の一は „D-ro Zamenhof“ と呼ばれ、其の新しい町の一角には我等の Majstro の肖像入りで、新町名を彫刻した大理石の腰石を新造して、今春其の除幕式が盛大に舉行された。これは Kaialuna Esperantista Federacio の盡力に依るものである。

又 Brazilo の Sergipe 州の首府 Aracajú 市に於ても、Brazila Ligo Esperantista の肝煎で、Sankta Isabel 區の一町名として „Esperanto „ の名が現われた。

外國に於て Zamenhof 通や Esperanto 街の續出はこれまで度々此の欄に掲載の通りであるが、わが大東京に此の出現を期すべく輿論の起るのは果していつの日であらうか。

## 盲目同志の榮譽

遂先頃までは全く名も知られて居なかつた盲目で貧乏な白面の一青年が、一躍其の名を天下に擧げると云う聞くだに朗かな話。

彼の名は Imre Ungar, Budapeŝto の同志である。



先頃 Varsovio 市で Chopin-konkurso が開催された際、同地の同志達が肝煎で此の盲青年も各國から参加した數十名に伍する事が出来た。ピアノ演奏法を教授して辛じて口を糊して居た同君は、出發からして既に同志の温情に依るの外はなかつた。

扱此の競演は數週間繼續されて、聴衆は實に數多くの名演奏に接したが、就中斷然異彩を放つたのはわが Ungar 君であつた。

彼の彈奏するピアノの音色の卓絶は云うに及ばず、其の神韻の漂わす靈妙極まりない感覺が聴衆を魅了したのである。其の感覺は完全に人々の心を捉えて、彼 Imre Unger 君は天才 Chopinista である事を告げ渡つた。

誰しも彼が一等に入賞する事に疑念を有たなかつたが、抽籤の結果として惜しくも二等を抽いたのであつた。それは兎も角今や此の盲青年の前途は輝きに充ちて居る。

見よ！雑誌は數段を彼に關する記事で埋め、新聞記者は彼を取り圍んで其の一言を得るに努め、文藝界や社交界も彼に興味を有つに至つたではないか。

社交界は彼の成功を祝して宴會を催し、彼の演奏會を告知する張紙は殆んど毎日の様に眼に觸れる。Imre Unger 君の名は今や敬愛の的となつて居るの觀がある。

而も我が Unger 君は放送局の依頼で一場の挨拶を爲すに當つてはエスペラントを使用して居る。何と我等同志に快哉を叫ばしめるではないか。我々は此の偉大なる同君の間接的宣傳を多としなければならない。彼の名聲に伴うてエスペラントも各國人の耳目を聳動するに違いない。彼の胸に輝く綠星章は無言の内にエスペラントが彼をして此の競演に参加せしめた事を語つて居る。そして雑誌や新聞の記者は是が非でも、其の徽章の意味を探究しなくてはならないと云う有様。

又ラジオを通じ彼はエスペラントで語る。聴く者は自然に此の言葉に關心を有たざるを得なくなる。

Ungar 君は年齒僅に二十三歳、けれどもエスペランチストとしては既に十三年。現今歐洲各國を音樂行脚中。

同君が經歷の劈頭をエスペランチストとしての光輝ある文字で飾つたのは誠に慶賀に堪えない。將來益々榮譽を重ねて我等の運動に大いに貢獻して欲しいものである。

## 國際言語大會續報

今春 ArnHEME の Esperanto-Domo に於け

る第一回國際言語大會の様様は大體先月號で述べたが、其の際に於ける二三重要な決議事項に就いて報道すると

- 1) 参加者一同は満場一致で ESPERANTO は活きた言語であるから、其の基底に關しては一切論議を加えない事を申し合せた。
- 2) 言語委員會に對しては活潑に其の機能を發揮する様に要望した。
- 3) 學士院に對しては造語の研究を續行し、句讀法、大文字使用法、前置詞使用法等の説明を發表する様希望した。

## エスペラント文通に依る調査

伊太利のエスペラント運動對外委員は、一般教育(科學、歴史、地理、教育法、手工等)の資料をエスペラント文通に依り、各國の中等以上の諸學校の男女學生から蒐集して居る。

調査の結果は機關紙 „L' Esperanto“ で發表し、此の種の事業に興味を有する人々には送附する筈。男女教員同志各位が學校間の文通に對する經驗談を寄稿される様希望して居る。宛名は

Delegito por Eksterlando de Itala

Esperanto-Movado:

Esperanto Centro Itala

Milano (Italujo). Galleria V. E. 92.

## 其の後の A. P. Schwartz 氏

世界大戰最後の犠牲者として冤罪の爲に、十年間の長い月日を鬼界ヶ島 Kajeno の牢獄中で呻吟した後、此の程漸く許されて自由の身となつたわが同志 Schwartz 氏の數奇を極めた運命は既報の通りであるが、愈々 Rejro の河畔に愛兒を待ち詫びて居る筈の母の膝下に歸つて行つたが、これは何と云う運命の無情であらうか。既に母は此の世の人でなかつた。たゞ愛兒の顔を見る事をのみ唯一の老いたる身の希望として生き續けて居た慈母は、Schwartz 氏が家に歸り着く前日に神に召されたのであつた。

子を思う母、母を慕う子、實に悲劇以上の悲劇である。

同志として一枚の葉書にもせよ同氏に寄せたなら彼はどんなに喜ぶ事であらうか。——同氏から返信も來まいけども。宛名は

S-ro Alphons Paoli Schwartz

Blumen str. 17, Kehl am Rhein, Germanujo



# ENLANDA KRONIKO



内地報道

## 日滿政府へ陳情書提出

Petskriboj al Ministroj kaj al  
Manĉuria Registaro

Oni prezentos petskribojn al Ministroj de Enlandaj Aferoj kaj de Edukado pri enkonduko de nia lingvo en elementan edukadon, ktp., kaj al Manĉuria Registaro pri similaj temoj kun subskriboj de tutjapanaj samideanoj.

近來 Esp. に関し種々な誤解を懷く者のあるに鑑み、高橋邦太郎氏等が主唱して内相宛陳情書を提出し、同時に文相及び滿洲國政府へも 에스語採用に關する陳情をなすこととなり廣く同志の署名を集めてゐる。

## 小坂狷二氏大阪に来る

S-ro Ossaka parolas en Osaka

Invitante s-ron Ossaka el Tokio, 5/vi Osaka Esp.-Societo havis sukcesan kunsidon, kiun partoprenis ĉ. 70 samideanoj, inter kiuj troviĝis s-ro Major el Kameoka kaj multaj el proksimaj gubernioj.

6月5日(日曜日) OES は小坂狷二氏を招待し 에스語講演會並に座談會を大江ビルで開催した。會する者約 70 名。神戸、御影、京都及び龜岡からも來會者あり、關西地方としては近年に珍しい程あらゆる意味で盛會だつた。

午前 10 時半より正午過ぎまでの座談會では小坂氏(日本語で)の同氏を中心とした初期の日本 에스運動の追憶談に次いで、

龜岡より來阪の S-ro Major の歐洲に於ける會合に關する話があり、午後 2 時より 5 時過ぎまでの講演會に於いては Prezidanto Oosaki の Saluto の後 s-ro Ossaka の „Kelkaj Observoj pri adjektivo“ の Espe-

★締切は毎月 15 日 ★報道は簡單明瞭に願ひたし ★紙面の都合および體裁の統一上、文體、假名遣ひの變更、原稿に對する加筆、削除および寫眞の取捨等は任されたし ★20 字詰原稿紙に横書きのこと ★封筒には内地報道と明記のこと ★寫眞返送希望の向は豫め申添えられたし(なるべく寄贈されよ)

rantologio の講義一席(日本語)、更に „Devo de nunaj esperantistoj“ の題下で „Ni ankoraŭ ne havis finan venkon, ni bezonas mil jarojn. Nia unua tasko ankoraŭ kuŝas en varbado, en propagando“ と氏一流の熱のある 에스語で絶叫され、S-ro Major 再び立つて „Faraono konstruis sensencan piramidon, sed S-ro Ossaka konstruis vivantan piramidon (J.E.I.)“ と小坂氏禮讚より日本國民性の美點のみを舉げて滿場を喝采させた。尙以上の他に兒島氏(大阪新星會長)近藤氏(京都)眞保氏(大阪 에스團體聯盟提案)及進藤氏(OES 會員)それぞれ 에스語で熱辯を振つた。當日小坂氏は連日來の御病氣にも係らず豫定通り來阪された。誠に感謝に堪えぬ。(OES 報)。

## エスペラント臨海學校

„Verda Hejmo“ en Somero

Oni havos familian, rondon „Verda Hejmo“ apud maro dum 2 semajnoj en la venonta somero.

日本で最初の試みとして、今月 21 日から 8 月 3 日まで 2 週間、紀州熊野の海岸に下記の通り 에스臨海學校が持たれる。

日課——エス語、勞働、海水浴、散歩、研究發表、共同翻譯、辯論會、茶話會、劇、音樂等。

講師——Major, 伊藤、林、南、小林、大野の諸氏。





費用 - 申込金1圓、會費2圓、宿泊費、  
合宿なら1日0錢、旅館なら1圓程度。

申込期日——7月10日

場所——三重縣北牟婁郡長島町 生産學園  
詳細規則書は生産學園宛申込みのこと。

### マヨール氏中學生に講演

S-ro Major faras Parladon antaŭ Liceanoj

奈良 S-ro Major は6月9日普及會の山川氏同伴來寧。天理教本部見物、奈良エス會宮武氏宅に一泊。翌日春日神社、大佛、博物館等見物。午後奈良中學で „Hungarujo kaj Japanujo“ と題して講話、純真な中學生に多大の感銘を與へた。(奈良エス會報)

白河 5月11日、S-roj Major, 小高來町。

白河中學で „De Parizo tra Novjelando al Japanujo“ の講演あり。講演前小高氏のエス語の概説があつた。翌日正午驛ホームで白河名物「立食ソバ」に「ウマイ」を連發、新潟へ向つた。(鹽田報)

### 佛國同志橫濱入港

S-ro Amo revizitas Jokohama.

濱の同志達の ŝatata amiko S-ro S. Amoureux は5月25日朝佛船アトスで再訪、荒川氏等に迎へられ、午後はオデオン座で Al ni libereco 觀賞。夜は24時まで吉田氏方で話過した。26日は19時より有鄰堂の147回例會に出席、今回の滞在は4日間。(橫濱エス協會富森報)。

國際複製美術展 6月11日(土)東京美術學校エス部で、第二回國際複製美術展開催。歐洲十餘ヶ國の美術愛好家と通信蒐集せる複製百數十點展覽。盛會であつた。(東京美術學校エス會報)

釧路エス會結成 5月30日講習會終了を機に釧路エス會結成。會長第一尋高校長兼實科女校長藤野氏 (丹報)

綠色結婚 S-ro 下村芳司は同志 F-ino 木村愛子と結婚され5月23日希望社で披露宴を催された。★守隨一氏は6月法學博士松岡男爵の媒妁で石澤壽子嬢と結婚された。★山田貞元氏も結婚された由であるが詳報に接しない。慶賀すべきである。

佛 Esp-isto 入港 佛船ダルトニヤン乗組 Violonisto, 橫濱エス會會員 Esp-isto S-ro André Sabot 6月初め再度橫濱訪問鈴木氏宅に一泊。8日歡迎會。4ヶ月後再訪の時には一人前の Esp-isto になつて東京や神戸を訪問したいと力んでゐた。(橫濱エス會報)

S-ro 宮川渡佛 橫濱エス會會員宮川省三氏は5月フランスへ留學の途に上つた。今夏パリに開かれる萬國大會に出席のはず。(同上報)

Kampanano 入營 名古屋エス界第一の人気者、Kampanano こと橋本春一君は近衛歩兵に入營のため5月30日18.5時名古屋驛發東上。多數同志の見送りを受け車窓から半身乗出し綠星旗を打振りつつ夕靄の中に消えた。(NES竹中報)



同志高橋朝洋丸無電局長と  
エス 掲 示 板  
ENŝIPIĜO KROM OFICBEZONO  
ESTAS MALPERMESITA

新星會の遠足 [大阪新星會]  
5月22日(日)春季遠足會を新緑の箕面へ。山の茶屋でささやかな宴を開き babilado に kantado に快を盡した。(Hosokaŭa 報)。

北九州大會決定 6月8日北九州 Esp-istaro 例會開催、加入の北九州及び山口縣の8 grupoj の代表者名田、杉原、井澤、田中、淺田、岩崎、林、中西出席、今秋加入團體外の同志

をも集め北九州大會開催を決定具體案は次回例會に持寄る事に申合せ。參加團體は下關エス會、梅花女學院エス會、門司エス會、小倉エス會、小倉師範エス會、八幡エス會、佛教救世軍エス部、戸畑エス會、Libera Esp-Klubo. (中西報)  
滿洲より英語廢止運動提唱 長春エス會の熱心な同志淵田多穂理氏は4月下旬「新滿洲國首都新京より英語廢止運動を提唱す」と題する印刷物を各方面に配布された。上記に就て照會は長春常盤町二丁目18の2同氏宛に。

エス宣傳の歌 別府、大分エス會では「國際語エスペラント宣傳の歌」を作り印刷に附して會員その他に頒布した。  
エスペラント醬油 最近京都市中に綠星印入の VERDA STELO 興國醬油といふのが現はれた。發賣元は木村兄弟商會。兄の方は samideano で熱心な Esp.-propagandisto の由。(福田報)

喫茶店 Klara 東京神田日活館横の一喫茶店は „Klara“ と改稱、gemastroj, kelnerinoj も目下 Esp. お稽古中、gesamideanoj が我家顔に出入し、來客を捉へては盛んに propaganda をやるので、若い學生などは歸りには „Adiaŭ fraŭlinoj, ĝis revido!“ などとやつて喜んでゐる。

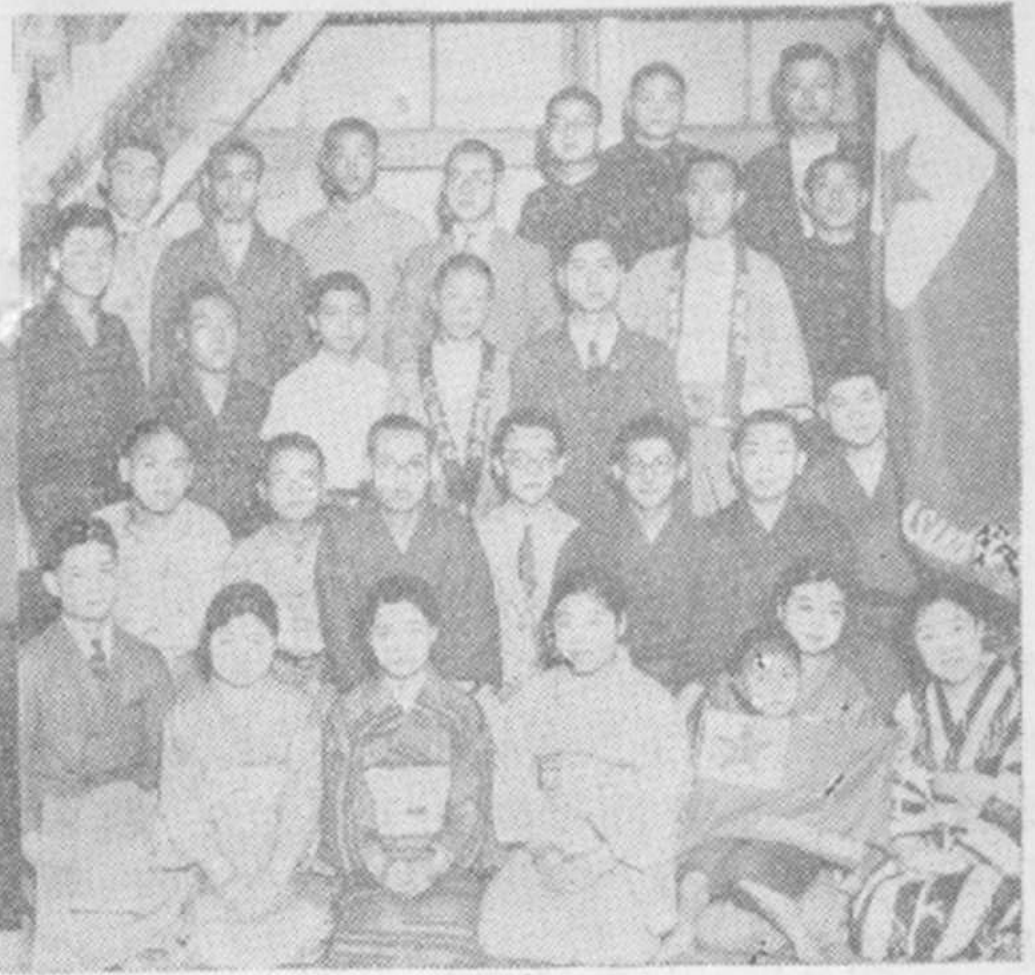


(右) 浅草ロンド第二回講習會紀念

★

(下) 釧路エス會創立紀念

前列右より3人目藤野校長、その隣中村講師



## 各地講習會 Esperantaj Kursoj

大阪〔OES〕毎火例會の教科書を Z-a Legolibro に變更。北區大江ビル二階 13 號室の大阪エス會の Esperanta atmosfero に浸られよ！  
京都〔同志社中學エス會〕1 月大學エス會より獨立、4 月から西村君中心に中堀先生を部長とし 16 liceanoj が毎日晝休時間に講習。

松代(長野)初等=4 月 12 日—5 月 14 日 20—21.30 時。メソヂスト教會で、用書「基本エス教科書」、講師栗林。受講者 12 名。★6 月 6 日—。毎日 10—12 時。木町山崎氏宅で。用書、講師同上。受講者 6。(栗林報)

東京〔浅草ロンド〕毎月第 1, 2, 3 日曜 19.30 時より相互研究會。會員約 30 名。5 月 3 日—6 月 3 日毎火木土第 2 回初等講習。受講 30 名

横濱 毎日曜 13—15 時。用書「ザ讀本」。會話を主とす。曙町鈴木宅で。受講者 7 名。指導者鈴木。(横濱エス會鈴木報)

釧路 5 月 20—30 日(連日)第一尋高。講師エス普及會中村久雄氏。受講者 26 名。

名古屋〔名古屋エス會〕東新町陸ビル 3 階聯盟事務所で、5 月 19 日より毎水 19 時より研究會。用書 Bonhumoraj Rakontoj. 由比氏指導

★中等=6 月 8 日—。毎水 19—21 時。用書 Tri Angloj Alilande. 田中氏指導。★初等=金城エス聯盟主催、南區熱田東町本田氏方で 6 月初旬—。(NES 竹中委員報)

京都 6 月 1 日常設講習所開設。所長伊藤榮藏氏。S-ro J. Major も rekta metodo により指導の任にあたるはず。(エス普及會報)。

東京〔學會〕初等=7 月 11 日—。★中等 7 月 12 日—。(詳細廣告頁参照)。

Diskutado per Esp.〔東大法、文、經エス會〕主として浦和、成蹊出身の在學學生十數名、毎週一回芝生で、毎回 temo を提出 Esp. で討論、仲々活氣がある。

2-a Naskotago〔京城醫專エス會〕6 月 22 日第二回の naskotago を迎へ、搖籃期を去り活動期に進みつつある。柴田教授指導の下に毎週輪讀會開催、學生が交互に指導者となり初等講習を開いてゐる。校内に確實な基礎を作り必然出来るべき朝鮮學生エス聯盟の狼煙を上るのが本會の使命であらう

Somera Domo apud Maro〔早大エス會〕5 月 2 日開講の初等科修了、引き続き中等科開講。聴講者 15 名。用書 „Kion Rakontas la amikoj de Peĉjo.“ ★6 月 12 日 pikniko を奥多摩方面に舉行。S-ro Maier の参加を得、愉快に一日を過ごした。★夏中休暇を

(學生聯盟  
だより)

利用して、千葉縣保田海岸に合宿することになった。同地方の同志諸君の御後援をお願いします。

第二早高エス會設立 兼ねて學校當局に設立願を出してゐたが、漸く許可され、ここに第二早高エス會は大學部から獨立した。

Kurso〔臨大エス會〕學内第 2 回初等講習會、5 月 9—20 日(土・日休)19 時より。講師 JBLE 柴山慶氏。用書「短期講習書」田代氏「補助讀本」。會話本位に指導 受講者 15 名終講茶話會には大部分がエス語で挨拶出来たほど成功的だつた。今後は毎日正午の休み時間に一定の教場に集合、會話、kantado の練習を盛んにするはず。輪讀會は従前通り 15 時より。用書は「カルロ」に移る筈。(佐々木報)



## 新聞雑誌とエス語

## 新聞

山陰新聞 5.30. エス語の講習會。  
5.30-6.1. 何故吾々は國際語エス  
ペラントを提唱するか(井上照月)★函館日日  
6.9. エス語開講 ★大和日報 6.31. 日本とハ  
ンガリー (ヨゼフ・マヨール) ★大阪朝日(奈  
良版) 6.11. 親日家ヨゼフ・マヨール氏 ★大阪  
毎日(奈良版) 6.11. ヨゼフ・マヨール氏。

## 雑誌

人類學雜誌 vol. 17, n-ro 4. Aidono  
al la studoj pri la haŭtlistela sis-  
temo de manplato de la japano. (日本人手掌  
紋理研究補遺——手掌紋理と左利との關係)  
(大忽那將愛) 12頁にわたるエス語論文、斯る  
學術雜誌にエス語が現れることは悦ばしい。  
湖畔の聲 6. 人の知らぬ食物(吉用悦藏)文  
中基教に國際語問題を結びつけてゐる。  
滿蒙 6. (n-ro 146) 樂土滿蒙の建設と國際用

語(淵田多穂理)新國家滿洲國の公用語及び  
外交用語としてエス語を採用せよと論ず。

工明會誌(東北帝大工學部) n-ro 13. 國際語  
の分析(堀田幹雄)國際語の分類、要素を説  
きエスペラントを理想的國際語と斷ず。★エ  
スペランチストの旅日記から——大連とハル  
ビン(桑原利秀)。★東北帝大エス會報告。

英語土木雜誌 近く創刊される英和對譯の同  
誌にはエスペラントの頁も設けられる由。

参考書にエス語 三省堂編輯所篇「分り易く  
覚え易い日本文法の研究」の7頁に「人造語た  
るエスペラント及びイードの如きは無論國語  
ではない」といふ記事と、同頁下欄に言語を  
自然語と人造語とに分けて、人造語の中に「ヴ  
オラビューク、エスペラント、イード等」と  
記し、なほ「人造語は將來無限に考案せられ  
るであらう」と書いてある。(一讀者報)。

## Al la Membroj de J.E.I.,

elkore salutas ĉe la okazo de l' vizito de  
Hada Shozo al Seattle sur sia vojo hejmen  
al Japanujo, gesamideanoj de nordokcidenta  
parto de Usono kaj Kanado kaj deziregas  
korespondadi kun ili.

## U S O N O

SEATTLE, Wash. Ges-roj Wayne Jackson,  
(Prezid. de Seattle Esp.  
Societo) 1318 1/2, 2nd Ave. [St.

S-ro George Adams, Apt. C. 214. University

S-ro Vincento Bronze, 565, Lee Street,

S-ro Matt Bronze, " " "

S-ro Alois Bronze, " " "

S-ro O. O. Huntley, 4410 Dayton Ave.

S-ino Mary Houseman, 111 Garfield St.

Dro Gastave Lewis, 6719 California Ave.

F-ino C.E Leenhouts, 421 10th Ave. North,

S-ro Phil Erust, 216 Seneca St.

S-ro Carl A. Johanson, 5206 Russel St.

S-ro George Larl, 2537, 12th Ave.

Dro. John Hager, 1026, First Ave West.

S-ro F. O. Johnson, 1916, North 46th St.

S-ro Jack Coskey, 330, West 45th St.

S-ro B. Lerman, 921, Twelfth, Ave.

S-ino Carmel Wilson, 1732, Fifteenth Ave.

S-ro E.R. Hollister, 3300, 35th Ave. South,

F-ino Doris Foye, 4721, Fifth Ave. Northeast.

Dro. T.J. Applenton, 1010, Shafer Building,

S-ro Dan W. Gibson, 208 Madison St.

S-ino Ida Kane, 5064 Republican St.

Washington Ge-sro A.B. Lenz, R. F. D. #2  
Bothell.

S-ro Lares P. Wood, 346 Cedar St. Renton.

S-ino Leah J. Coskey, R.F.D. #1 Renton,

S-ro W. B. Anderson, Hillyard.

S-ro R.W. Mason (Del. UEA), North 4013  
Howard St. Spokane.

S-ro Jvar R. Ekstrand, Ostrander.

California S-ro R. T. Arnold, Riverside.

S-ro D. L. Beard, Behlow Build-  
ing, Napa. [Los Angels.

S-ro Harry B. Blee, 636 Federal Building,

Oregon S-ro Franklin Edwards, P. O. Box  
#139, La Grande, [Davis St.)

S-ro J.C. Cooper, McMinnville, (240 South

PORTLAND, Oregon S-ino J. A. Kincade,  
1674 Minnesota Ave.,

S-ro H. Denlinger, R.F.D. #5, Box #615.

S-ino Louise Caswell, 791 Overton St.

S-ro B.F. Fairhurst, 1116 the Alemada.

Ohio S-ro F. Stancliff, 1224 Sacket St.  
Cuyahoga Falls.

## K A N A D O

VANCOUVER, B.C. S-ino F. Saville, 777 Bur-  
rard St. [rard St.

F-ino Doris Saville (Del UEA), 777 Bur-

S-ro Gust Carlson, 1100, Burrard St.

ESQUIMALT, B. C. S-ro Robert Redhead (Del  
UEA.), Canteen Road.

S-ino D. J. Parlane (Del UEA.), 438  
Admirals Road.

British Columbia S-ro Fred Coombes, Bickles.

S-ro John Edward Gale,  
1160 Burdette Ave., Victoria.

S-ro A. Mallory, 1309-11th Ave., New  
Westminister.

ALBERTA S-ro H. G. Hearn, 10721-98th St.  
Edmonton. [Grande Prairie.

S-ro V. V. Obrastoff, P. O. Box #1693,



## 地方會機關誌

**El Sudo** 2; Jun. (高知エス會) 内容相當充實してゐる。Ĉe P' Rivero Ĉikuma, Pri la antikva-literoj de Egipto 等大いによし。

**La Informilo antaŭ-Kongresa** 1; Maj. (エス普及會北海道本部) よき企てである。

**Organo de Nova Stelo** 26; Jun. (大阪新星會)

**La Aŭroro** 5/II; Maj. (福岡エス俱樂部)。

**Verda** 3; Maj. (明治藥專エス會) Terminaro por farmacio, 要語集、會の性質上有意義。

**Bulteno** 3; Maj. (名古屋エス會)。

**仲のよい友** (六月創刊) (大阪此花區上福島北1の67 仲のよい友會) 定價送料共4錢。菊倍判活版刷2頁。創刊と共に編輯方法を確立した態度はよし。但しエス語に全然關係なき詩歌等募集は貴重な誌面を益々狭めるのみ

**La Grandurso** 1/I; Maj. (苫小牧エス會)。

**FER** 16; Jun. (東京鐵道エス會) エス文を主とす。タイプライター荷蕪版刷で読みよい。

**聯盟通信** 8. (日本鐵道エス聯盟)。

**Semanto** 1/I; Jun. (宮崎エス會)

## KORESPONDA FAKO

學會會員年一回無料・二回目より一回10錢・會員外一回30錢、掲載誌贈呈。L=letero, P=Poŝtkarto, IP=ilustrita poŝtkarto, PM=poŝtmarko, F=fotografajo, E=esperantaĵo, G=gazeto, dez.=deziras, kore.=korespondi, iŝ.=interŝanĝi, kol.=kolekti, kĉl.=kun ĉiulandaj (gesamideanoj)。

**Francujo:** S-ro Marcel Chaleix, 56, Rue de Babylone, 56 PARIS (7<sup>e</sup>) dez. kore pri ekonomivivo, socivivo, iŝ., F, PM. ktp.

**Danujo:** S-ro Vagu Aagē Tredslund, Särslöv, Starrklint, Sjöland.

**Rumanujo:** S-ro L. Bordão, (delegito de U. E. A.) Ial Haria 19, SALONTA, dez. kore. kun serioza japana s-ano aŭ s-anino.

**Estonujo:** F-ino Leili Tomberg (juna instruistino) Mustree.

**Svedujo:** F-ino Astrid Nilsson, Hospitalsgatan 3b, LUND.

**Italujo:** F-ino Lina Gasparri, Corso Vittorio Emanuele 73, TORINO.

**Hungarujo:** F-ino Hermino Deim, BADACSONYTOMAJ.

**Ĉeĥoslovakujo:** S-ro Josef Mazur, Ivanovice-na-Haně, N-o 518, Moravia. dez. iŝ. skrabojn.

**MADEIRA** (葡領マデイラ島): Mateus de Gouveia (17 jara liceano), R. 5 de Outubro, 19, Funchal.

### Hispanujo

S-ro Félix Martín Triep, Democracia, 88, ZARAGOZA. kaj liaj junaj amikoj dez. kore. kaj iŝ.

PI, L, PM, G.

S-ro Alfonso Perez, y Gil Estebanes n. 9-2<sup>e</sup>, ZARAGOZA, en la nomo de Grupo Zaragoza Esp-ista, petas klopodon de japanaj samideanoj, por aranĝi ekspozicion pri tiu lando.

### Nederlando

S-ro F. J. Fröger, a. 243 WILDERVANK.

S-ro J. G. Waale, Lusterstraat 9. NORKUM, Gorinhem.

F-ino Betsy Kingmans, Nieuwstad 32, GORINHEM.

F-ino G. Ruardi, Leeuwarderdwarsstraat 6, Sneek (Friesland).

S-ino J. M. Menninga Wolthers, 3 Willem III laan, Wassenaar (apud HAAG).

### Latvuj

S-ro G. Veiland, Dika iela N. 10, oz 10 JELGAVA.

S-ro M. Lindeman, Samideanino, Elza Migla, L. Fabrikas iela N. 1, SLOKĀ.

### Ĥinujo

F-ino B. Ha Lin, F-ino Kanjo Fu (junaj studentinoj), c/o M. K. Wong, G. P. O. Box 88, Canton, dez. kore. kun japanaj gesamideanoj.

### Japanujo

S-ro Ogiwara-Kōtoku, Kanebō Higasi-syatak, Nagahama-mati, Siga-ken. Dez. kore. kĉl. S-ro Hisao Jokaŭa, 56 Imagi-maĉi, TOJAMA. F. von Kunoŭski 教授の國際速記法による日本語速記術で文通希望。

S-ro S. Haŝimoto, Konoe-hohei 4-11, TOKIO dez. interŝ. IP.

S-ro A. Kanada (36 jara kalkulisto), P. O. Box 1, NAOGATA, Fukuoka-ken, dez. kore. IP. L. pri diversaj temoj kĉl., iŝ. monerojn. S-ro Tarō Niŝimi (21 jara historistudento), aŭ Kanagasaki, UOZUMI, Hiogo-ken. dez. iŝ. L. kaj G., kore. kĉl. pri kultura ideo, historio, geografio. literaturo ktp.

S-ro Hajaŝi Cukasa, Kinsen, Keihoku, Koreujo. dez. kore., iŝ. E. IP. modernaj kĉl.



# エスペラント初等讀物

小野田幸雄

## Lia profesio

AMIKO. — “Nu, kion faras via filo en Parizo?”

FARMISTO. — “Li skribas.”

AMIKO. — (*ironie*) “Por sia plezuro aŭ por mono?”

FARMISTO. — “Ĉiam por mono, kiam li skribas al mi.”

## Pri literaturo

HELENO. — Kial la noveloj ĉiam havas feliĉan finiĝon?

LUCIO. — Nu, tiu, kiun mi legis hieraŭ vespere, ne havis bonan finiĝon.

HELENO. — Ĉu vere?

LUCIO. — Ne, mia patrino ĵetis ĝin ... la fajron.

## Lia deziro

La doktoro staris apud la lito, kaj rigardis serioze la malsanulon.

— “Via koro batas malforte kaj mi ne povas kaŝi al vi, ke estas tre malsana, li diris. Ĉu estas iu, kiun vi deziras vidi?”

— “Jes,” respondis mallaŭte la malsanulo.

— “Kiu li estas?”

— “Alia doktoro.”

〔解説〕 總ゆる文、わけても anekdoto (一口噺)、fabelo (御伽噺)、fablo (寓話)、legendo (傳説)、rakonto (物語)、novelo (小説)、dramo (戯曲) 等に於ては、讀む者心を虚しうして其の文に對し、文と心と一つ垣牆に鎔け入つた時、おんもり浮び上る其の趣味情調を遺憾無

く味つて後にこそ、始めて眞の可笑味、面白味、美しさを悟了し得るのである。文の正當な解釋も、合理的な文法關係の認識も、エス語の全機構に潜む科學的な調和に對する驚嘆も、總てが此處に其の源を發すべきである。即ち、正しく知り正しく解せんが爲に正しく味ふと云ふ事は、文讀解上何事にもいや増して、重且大なる事であらねばならぬ。其の爲には文中の一節一句は云はずもがな、一語一記號の末々に迄、極めて敏感な觸手を働かさんと、常に讀者諸氏は心掛けて居らねばならぬ。

さて此處には anekdoto が三つあるが先づ始めのからかたづけてゆく。標題の profesio は解らねば其のまゝ保留して次を見る。いきなり Nu と云ふ字がヌーツと出る。直ぐ koma のある事からしても解る様に間投詞で「さあ、さて」である。kion faras は「一體全體何をしてゐるのか」と云ふ調子。farmisto は farmulo 又は farmanto と云ひ、farmi が「小作する」であるから「小作人」。次に行つて括弧 (parentezoj) の中に書いてある字が未知でも後の文句、わけても por mono から察せられるであらう。ĉiam, kiam の關係を想起し skribas al mi の skribi が何を skribi するのか解すれば此の anekdoto の味は十分に呑み込める。skribi は屢々本文の場合と同義に用ひられる。profesio=職業、業務。(參考) ofico=官職。metio=手職。okupo=仕事。(何でもよい、何かして居りさへすればそれが okupo)。



次の文に移る。literaturo は「文學」であるがこれの記憶法は（總てかゝる、記憶法の如きものは、他の語の知識ある人に對してゝはない。將來エス語が我國教育界に導入さるべきを豫想し、此の簡易なる語に於て猶且多くの人々の苦惱の種となる、「如何にして勞少く此等の基本單語を記憶すべきか」の問題に對し、今日よりおもむろに其の研究に着手し、來るべき時代に於て完成した形に於て之を活用すべく心掛けるも亦エス語教育家の任務ではあるまいか）。litera turo（文字の塔）即ち文學と云ふものは文字で出來上つた立派な塔である、と考へる。novelo も同様に、

novelo（小説）=nov（新しい）+el+oと考へれば、「小説は創作である、即ち新しい事件を材料として其れから（el）作つたものである」。斯様にすれば novero と誤る様な事も無い。finiĝo は fin+iĝ+o で此處では「終了」であるが「語尾」の意にも屢々使はれる。

tiu, (kiun mi legis hieraŭ vespere), ne havis bonan finiĝon.

Ĉu vere? は Ĉu estas vere? の略。主語が無いので副詞を用ひてある處に留意されよ。次の Ĉu vere? の詞に對する答が Ne になつてゐるのを諸君は一寸奇異に感ずるかも知れぬが、此れは前の tiu ne havis bonan finiĝon を受けてゐるが爲。(五月號 p. 177 參照) ĝin の次の punktolinio は一寸躊躇する貌。la fajron は en la fajron の略。

vespero（夕）=vesp（やま蜂）+er+oとすれば逆に vespo を憶える事が出来る。

最後の一題。doktoro は「博士」ではあるが、斯様な場合は必ずしも「博士號」所有者とは限らぬ。serioze=謹嚴に

malsanulo（病人）=mal+san（健康な）+ul+o

醫者の言葉を見る。batas malforte からして koro は此處では「心」でなくして「心臓」であると解る。すーツと見てゆくと al vi, ke とあるので ke 以下の事を ne povas kaŝi するのであると考へ、次を見ると li diris とある。此の形式は佛蘭西語、伊太利語等の本に多い。即ち此の li は la doktoro であり、li diris は doktoro の言葉ではなく地言葉である。estas には「である」「がある」の二つの意がある。本文の Ĉu estas iu は後者の場合。

以上三つの會話體の例に依り相異なる色の書き表はし方を知る事が出来る。

### 〔譯〕 彼の職業

友達——なあ、おめえ様んちのせがれバリーで何しとるだ。

小作人——書いとるだ。

友達——（皮肉に）なぐさみにけえ、金取りにけえ。

小作人——あいつ、われんとけえ書いてよこす時は何時も金だ。

### 文學に就いて

ヘレナ——小説て云ふものなぜ何時もめでたしめでたしなんでせうね。

ルチャ——あら、私がゆふべ讀んだの、めでたしちや—なかつたわ。

ヘレナ——本當？

ルチャ——えゝ、お母様が投げちやつたの……火の中へよ。

### 彼の願ひ

博士は寢臺のそばに立つてしかつめらしくじつと病人を見つめてゐた。

——心臓は打ち方が弱い、で貴君は非常に悪いと申し上げなければなりませんで何人か貴君のお會ひしたい方がおありですか。と云つた。

——はい。病人は低く答へた

——それはどなたです。

——他の先生。



# 外國語を會得するは至難の業

## 副詞の練習 (II)

— 初等エス作文の練習 —

小此木貞次郎

前號に引續き副詞の用法を練習する。

### 8) 朝は氣持がよい。

「朝は」を副詞句にすると, en la mateno (matene でもよい)で、「氣持がよい」を ni, oni の如き一般的代名詞で書けば文句なく Oni sentas agrablecon en la mateno. 或は Matene ni sentas agrable. のやうに云へる。この様に oni, ni 等の主語と senti といふ動詞を使へば簡単だが、わざわざ ni や oni を持ち出さず、もつとアツサリ片付けたいと思ふなら、無主語の文章を書けばよい。すると前掲の (7) のやうになる。

En la mateno (matene) estas agrable.

同様の例文で場所の副詞で「此處では仲々面白いです」。といった場合

Tie ĉi estas sufiĉe interese. となる。

### 9) 外國語を會得するは困難である。

外國語 fremda lingvo (fremdlingvo), 會得する ellerni, 困難な malfacila. さてかうした文章で「——することは」を主語とする場合は infinitivo を用ゐる。英語などではこの場合、To master a foreign language is hard. と書くが、普通 it なる無意味の主語を持つて來て、It is hard to master a foreign language. と書く。此の無意味の主語 it を英語の infinitive (不定法) では頻繁に使ふ。ところがエスペラント

では infinitivo を直接主語に使ふのが最も普通である。(之は日本語と同じ用法で、我々日本人には最も使ひ易い)。そして infinitivo を直接に主語とするところから、それを修飾する語は前號に度々述べたやうに副詞形をとらねばならぬ。

Ellerni fremdan lingvon estas malfacile.

同様の例を挙げよう。

a) 日本人が歐洲語を會得するは困難である。

b) 己れを知るは難し。

c) 新鮮な空氣の中に行くは氣持がよい。

a) Ellerni eŭropan lingvon estas malfacile por japanoj.

b) Koni sin mem estas malfacile.

c) Marŝi en freŝa aero estas agrable.

### 10) 彼女がやつて來るといふことは確かだ。

確かな certa, やつて來る veni, viziti. 之は 9) を更に一步進めた場合で、主語句が infinitivo では間に合はないで、一つの主語をもつた完全な文章をなす時である。即ち ke, ĉu, kiam, kiel 等 (及び之等を用ゐた句例へば en kia maniero = kiamaniere 等) 等によつて先行された文章を主語とする場合で、この時の修飾語は副詞をとらねばならない。

Estas certe, ke ŝi venos.



「彼女が来る」といふことは未來に屬してゐることである故、Esp. では *venos* と書き時間の觀念を正確に表はす。同様な例文を提出すれば

a) 君はお父さんを愛するか。何です！そんなことは勿論です。

*Ĉu vi amas vian patron? Kia demando! Estas kompreneble, ke mi lin amas.*

b) 君がその仕事を成し遂げるかどうかは吾々にとって重大なことでない。

*Ne estas grave por ni, ĉu vi plenumos tiun laboron aŭ ne.*

c) ソクラテスは紀元前何年に生れたか明瞭でない。

*Estas malklare, en kiu jaro antaŭ Kristo Socrates naskiĝis.*

吾々が日常會話や演説等で (9), (10) の場合例へば *agrabla* といふ所を *abrabla* と間違つてすましてゐることがよくある。即ち前の方で *~i* を主語としてゐながら、少し後の方になると夫を忘れ、*~a* と口に出して了ふ。之などは全く注意深い練習により矯正さる可きである。

#### 11) 幸にも彼は死ななかつた。

幸にも *feliĉe*, こゝに注意せねばならぬことは同一の副詞で (a) 文全體を修飾する場合と、(b) 單語のみを修飾する場合と兩用法がある。この例文は (a) で *Feliĉe li ne mortis.*

(b) の場合だと *Li ne mortis feliĉe.* (彼は幸福な死に方をしなかつた。)

#### 12) 第一に私は自分の義務を果さねばならぬ。

第一に *unue*, 數詞に *e* を付し順序を表はす副詞とする。同様第二、第三 *due*,

*trie*. 義務を果す *plenumi sian devon.*

*Unue mi devas plenumi mian devon.*

之で大體通常な形も終つたが尙特殊な形、前置詞 + *e* (*apude* 等), *koncerne ~n*, *tiele* 等が残されてゐる。又一段特別な用法 *multe da*, *kelke da* の副詞形、分詞に於ける副詞形 (*estante*, *surprizite* 等) もある。前者は本欄で練習してもよいが、一先づ副詞の練習を打切り別の機會に取り上げよう。後者はやゝ程度は高くなるし夫々それのみで一回以上を費す問題である故之も他の機會に譲る。

### 練習問題

- 1) 私は朝夕散歩します。
- 2) 小川が家の近くを流れてゐます。
- 3) 彼は快くその翻譯を引受けた。
- 4) こゝではもう可成涼しいです。
- 5) 近頃は職を見つけることは非常に難しい。
- 6) さうすると彼が東京へ行つたといふことは怪しい。
- 7) 彼は親切にも道を案内してくれた。  
〔語彙〕 快く *volente*, 翻譯 *traduko*, 引受ける *akcepti*, 可成 *sufiĉe*, 職 *profesio*, 見つける (此の場合) *akiri*, *trovi*, 怪しい *dubinda*, 親切にも *bonkore*, 道を案内する *gvidi la vojon*.

### 〔譯文一例〕

- 1) *Mi promenas matene kaj vespere.*
- 2) *Rivereto fluas proksime de mia domo.*
- 3) *Li volonte akceptis fari la tradukon.*
- 4) *Ĉi tie jam estas sufiĉe malvarmete.*
- 5) *Lastatempe akiri profesion estas tre malfacile.*
- 6) *Do estas dubinde, ke li iris Tokion.*
- 7) *Li bonkore gvidis por mi la vojon.*



# Ĥ の 發 音

小坂 狷 二

Ĥ はイギリス語又はフランス語だけしか學んだことのない日本人には耳なれぬ奇異な發音と感ぜられるであらうが、ドイツ、ロシヤ、オランダ等歐洲大陸の多くの國語には盛に用ひられる音で、なほ英國 (Britujo) でも イングランド (Anglujo) 語にはないが同じ土地つゞきのスコットランド語には存在してゐる。

日本人にとっては奇異な音と思はれる音ではあるが、困難な音ではない。少し練習すればちき出来る音である。と云ふよりは實は日本語にも似寄りの音が存在してゐるのである。元來 **Ha** の音は前號「發音の指南」(7) に述べた如く呼氣が喉のどの部分にもさはらず出る開放的な音である。然らば日本の「はは」(母)の發音は *haha* か。否、初の『は』は *ha* と發音されるが、次の『は』は初の『は』と同一に發音されない、幾分かすれた響をたてる。即ち *haha* ではなくて幾分 *hâha* に近い音である。但しこの第二の『は』は Esp. の *â* 程ひどくかすれず、極めて僅かかすれるのではあるが第一の『は』、即ち *ha* とは兎に角異つた音である。(自ら『はゝ』をくりかへし發音して見よ)。*hâ* は此の『はは』の第二の『は』をもつとかすらせた音である。

同様に『本』は *hon* であるが、『御本』は多くの日本人は *gohon* の様に發音する。尤も Esp. の *ho* は『ごほん』のほよりももつとかすれる程度は多い。

日本の下司な笑ひ方に『イヒゝゝ』と云ふのががあるがこの『ひ』に至つては *hi* でなくて正に *hi* である。

此の如く日本語にも微弱ではあるが Ĥ

の音が用ひられてゐる。それどころか日本人は多くの場合『は』行音を兎角幾分かすらせて Ĥ に近い音に發音する癖がある。即ち前號 **H** の發音の説明で注意した様に日本人はむしろ **H** の發音に當つてかすれを出さぬよう、母音に近い朗らかな **H** の音を出す様先づ練習する事が必要である: **haki, hela, himno, horo, hura.**

次に **ka** を發音して見よ。此の時舌の奥が喉の壁にふれ、それを呼氣が突破するのが感じられるであらう。即ち **k** は喉壁にふれた舌の根を突破する破裂音である。次に口を *a* の口形にし、喉其他を開放してそのまゝ呼氣を出して音聲を發する(即ち聲帶を振動させる)、それが **ha** の音である。比較練習: *ka, a, ha.*

次に矢張 *a* の口形をしたまゝ舌の根を幾分喉壁に近づけ其の間をすり抜けるやうに強く呼氣を出して *ha* を發音せよ。甚だかすれた『は』の音が出る。それが *hâ* の音である。即ち *hâ* は破裂音 *ka* に對する摩擦音である。練習: *a, hâ; ka, ha, hâ.*

*Ĥe, Ĥi, Ĥo, Ĥu* も同じ要領であればよい。練習: *e, he, Ĥe, ke; i, Ĥi, Ĥi, ki; o, ho, Ĥo, ko; u, hu (u の口形のまゝ, 唇を動かさぬやう注意), Ĥu, ku; Ĥemio, Ĥino, Ĥoro, Ĥoro, koro, Ĥano, Ĥaoso, Ĥimero, Ĥolero, Ĥho.*

〔注意〕 *ah* の *h* は響がなく聞こえぬ(前號「發音の指南」参照)が *ĥ* は響(摩擦音)がある故 *aĥ* の *ĥ* は耳に聞こえる: *aĥ* (*a* を發音しそのまゝでかすれた呼氣をつゞかす: あゝ), *eĥ* (えゝ), *iĥ* (いゝ), *oĥ* (おゝ), *uĥ* (うゝ)。



# 諺の研究

小坂 猪二

**Ne longe sinjora daŭras favoro.**

男心と秋の空

殿御の寵 (sinjora fovoro) は長くつゞかぬ; sinjora は favoro と韻を合はすため daŭras の前へ出したもの。類例: Sinjoro karesas, sed baldaŭ ĉesas. 殿御は愛撫する, 然しぢきにやめる。

**Akiro kaj perdo rajdas duope.**

もうけと損失は合ひ乗りをしてゐる一方にもうけあれば一方では損失あり、金は天下の廻り持ち。類例:

Enspezo postulas elspezon.

収入は支出を要求す。

Hodiaŭ supre, morgaŭ malsupre.

今日は上の方に居るが明日は下になる, 榮枯盛衰。

Kiel akirite, tiel perдите.

獲れば失ふ (獲られたやうな風にして矢張り失はれてしまふ)。

**Inter la blinduloj reĝas la strabuloj.**

鳥なき里の蝙蝠

盲人の間ではやぶにらみが王様だ。

Se homoj mankas, infano ankaŭ estas homo. 人間(大人)が居なければ赤ン坊でも人間(の中)。

**Laŭdu belecon de l' maro, sed ĉe rando de arbaro.**

君子は危きに近よらず

海之美を褒めるのもよい, 然し森のふちで (褒めよ, 乗り出しては危険)。

Laŭdu la maron, sed restu sur la tero. 海を褒めるもよい, 然し陸の上に

とどまつて居れ。

此の二例の如く —u..., sed...『—せよ然し……』は『—するもよいが然し……』の意に用ひられる。—u..., kaj...『—するがよいそうすれば……』。

**Danĝera estas bovo antaŭe, ĉevalo malantaŭe, kaj malsaĝulo de ĉiuj flankoj.**

牛は前が危険 (角で突かれるから), 馬は後ろが危険 (蹴られるから), 馬鹿はどちらの方面からも危険

**Kun kiu vi kuniĝas, tia vi fariĝas.**

朱に交はれば赤くなる

汝の友とする者 (その者と一緒になつてゐる者) のやうな風に汝はなる。類例:

Kun kiu vi festas, tia vi estas.

共に祝ひ合ふ (共に飲み合ふ) 者のやうな風になる。

**Vazo rompita, longe sin tenas.**

柳に風折れなし

こはれた (こはされた) 花瓶は長く保 (も) つ。類例:

Helpas krako kontraŭ atako.

さわざをあげれば攻撃を免ぬかる。

krako ガタガタ音を立てる (こゝでは攻撃されてさわざ立てる, 悲鳴をあげること)。helpi kontraŭ... ……を防ぐ助けとなる。

## 前 號 正 誤

六月號「諺の研究」中 左欄11行 apostolofo は apostrofo の誤。



## 洋書の定價に就て急告

昨年末の金輸出禁止に伴ひ、圓價暴落のため、本會は取次洋書の定價を約五割方引上げましたが、一時對米 35 弗見當に落着いた爲替相場も、インフレーション政策要望の大勢が臨時議會に強く反映して以來、漸次下向きとなり、30 弗近くまで下り、三十弗臺を割る形勢すら見えるにいたりました。

この間、一般洋書取次業者は隨時價上げをして來ましたが、本會では 1 月 20 日の改正以來一回も變更致しませんでした。これ以上相場下落のばあひは、現在の定價の維持は困難でございます。

普及運動の上からも、洋書の價上は極力避けたいのですが、今日の情勢では、やがて對米二十弗臺を現出することは脱れまいと思はれますから、非常に近い將來において、本會取次の洋書も幾分價上のやむなきにいたるかと存じます。

價上をするにしても、急激な變動のない限り、なるべく遅くしたいのですが、たぶん八月初旬には斷行することになりはしないかと存じます。以上お含みおき願ひたく豫告する次第です。

日本エスペラント學會洋書取次部

## エスペラント講習會

### A. 初等科

期 間 7 月 11 日 (第 2 月曜) より 9 月 8 日まで  
時 日 毎週 月・木 兩日午後 7 時より 2 時間宛  
講 師 日本エスペラント學會理事 大井 學 氏  
教 材 エスペラント講習用書 (定價 1 部 30 錢)

### B. 中等科

期 間 7 月 12 日 (第 2 火曜) より 9 月 9 日まで  
時 日 毎週 火・金 兩日午後 7 時より 2 時間宛  
講 師 日本エスペラント學會評議員 宗近 眞澄 氏  
教 材 ザメンホフ讀本第一卷 (定價 1 部 20 錢)  
會 費 兩科共全期各 2 圓  
會 場 財團法人日本エスペラント學會階上  
(市電本郷元町下車お茶の水文化アパート横入る)





# 着洋書

海や山への旅には下記新着洋書をぜひ!!

D-ro L. L. Zamenhof

FABELOJ de ANDERSEN (III) 定價 1 圓 10 錢  
送料 4 錢

待ちに待たれたザ博士遺稿「アンデルセン童話」第三巻が出た。  
エスペランチストは誰しも一部はぜひ持たなければならない。

STEN BERGMAN

TRA SOVAĜA KAMĈATKO 上製 4 圓 30 錢・並製 3 圓 20 錢  
送料 上 10 錢・並 8 錢

鐵道を持たぬ野生の大半島、吹雪に包まれたカムチャツカの冬、そこに描き  
出される日・鮮・支・露、その他アイヌ・ヤクーツ・コルヤツク等々極東諸  
民族の民族的個性。興味深きこと小説以上。

Francisko Szilágyi

TRANS LA FABELOCEANO 定價 2 圓・送料 4 錢

「おとぎの海のむかうにアダムとイヴがゐましたとさ……」だが、このイヴ  
は或日大発見をして、アダムに申しました。「赤ン坊は鶴が持つて来るんぢや  
ないんだつてさ！」そんな大變なイヴなんです。だからこの「童話集」を子  
供なんかに見せちやイカンですゾ!

アカイ ロシア ノ 5 ネンケイカク ワ イカニ ススミツツ アルカ

—— 社 會 主 義 建 設 の 描 寫 ——

## LA PAŝOJ DE LA JARKVINO

ロシアにおけるいろいろな方面の人人が各自の立場からロシアを内側から眺めた

定價 1 圓 20 錢 ★ 送料 4 錢

Leono Vienano: ESPERANTO PER ESPERANTO 80 錢・送料 4 錢

Rekta metodo のエス教科書、エス教育者の好参考資料

第十一回 SAT のプロトコロが来ました

PROTOKOLARO PRI LA XI-A KONGRESO EN AMSTERDAMO

定價 40 錢・送料 2 錢

第十回大會のプロトコロの残部少數在庫あり (定價 60 錢・送料 2 錢)

東京市本郷區  
元町一ノ二四

財團 日本エスペラント學會  
法人

電話小石川 5415  
振替東京 11325



夏はよし、緑濃き木蔭に海からの微風を浴びながらエス語の本を繙かん

## PER BALONO AL POLUSO

定 價 6 圓 90 錢  
送料 21 錢・内地外 30 錢

北極へ！北極へ！永遠の氷に鎖された極地の空をさして、氣球はひたすらに飛んで行く。しかし、あゝ、離陸地に遺留された一本の綱、それがつひに運命の綱であらうとは！これは十年後屍となつて故國へ凱旋したノールウェイ探險隊三勇士死の放浪記。興味深き記述、流麗な譯文、豊富な寫真版。やがては氷上に斃れるとも知らぬ身の、上氣嫌のユーモアに満ちた日記を添ふ。

## TRIDEK JAROJN EN LA ORA NORDO

上製 3 圓 75 錢・並製 3 圓（送料各 8 錢）

彼は生れながらの放浪者であつた。世界を跨にかけて歩いたあげく北氷洋のエスキモーの酋長となつた。隔絶した極寒の地にあること三十年。北米近海で難船にあひ、つひに無一文で故國へまひ戻るまでの黄金極地の奇しき運命の滞在記。

## ETERNA BUKEDO

定 價 6 圓 60 錢  
送料 21 錢・内地外 30 錢

これはエス詩壇の驍將 Kalocsay が世界に贈る《永遠の花束》！  
22ヶ國語の 100 に餘る詩人の名品百數十篇。あなたの書架にぜひ

## Disrompo

定價 60 錢  
送料 2 錢

彼女の夫、プロレタリアの裏切者はデツキの上に斃された。彼女は、しかし……彼女の父艦長は出港の命令を下した。かくて十月革命の先驅赤色巡洋艦 Aüroro は錨を抜いた。クロンスタットを後に、巨砲は首都に向けられた。

## Aspazio

定價 1 圓 10 錢  
送料 8 錢

史上未曾有の黄金時代をアテナに現出して文武萬代に輝く大政治家ペリクレスと、才色の譽一世に高き美姬アスペシヤの燃えあがる愛の悲劇。稀世の英雄も熱い涙の持主であつた。譯はザ博士の愛弟レオン・ザメンホフ。

東京市本郷區  
元町一ノ二四

財團  
法人

日本エスペラント學會

電話小石川 5415  
振替東京 11325

### エスペラント第一讀本 定價十錢

見本入用の方は 2 錢切手 5 枚同封、直接著者宛に御申越し下さい。又同時に 5 部以上の御注文には二割引で送料當方で負擔します。

正誤表及補遺が出来ました。御入用の方は 2 錢切手 2 枚そへてお申込みあれ

石川縣山代町 竹内 隆 吉  
振替金澤 2537

（油繪コンテイの肖像畫注文に應じます）

### 移轉のおしらせ

豫告の通り、本日下午記新事務所へ移轉致しました。今後の御通信御注文はすべて新住所宛に願ひます。

6月24日 日本エスペラント學會

——新事務所所在地——

東京市本郷區元町一丁目二四  
（市電元町下車、お茶の水文化アパート横入る・上記は改正番地で一般では十番地と言つてゐます。御注意を）  
新電話番号小石川 (85) 5415



詳細目録  
呈進書

# 鐵塔書院

エスペラント  
刊行書目

東京 振替 電話 九二七  
神田 一三三 九八七  
田部 三三三 九八七  
ツブリ 橋通 九八七  
九通

武藤丸楠編

四六判  
一三〇頁

定價五十錢  
送料六十錢

## ★日本エスペラント學事始

伊井迂氏談論集

諸君は日本へエスペラントがやつて來た當時のことを知つてゐるか。其の頃どのやうな人物が居つてこの言語の普及に努力し情熱を注いでゐたかを知つてゐるか。又どんな奇人が居て奇行珍談を残しどんなグループがあつたかを知つてゐるか。日本のエスペラント運動が今までに經て來た歴史は又日本の立派な文明史の一部をなすものだ。ここに現れた伊井迂氏の書物は彼がその物凄い記憶力と恐るべき熱情と正しい認識とをもつてエスペラント及び日本のエスペラントに對する蘊蓄と記憶とを傾けて語り出したものだ。これはエスペラントを編んだ人についても又適所適材と言ふ平凡な語をもつて語りこの平凡ならぬ書の實物を見て貰ふことによつて推賛を頂戴し度いと思ふ。諸君の是非座右に一本をとり給へ!

目次  
▲蛙と鼠の大合戦 ▲秋田雨雀先生 ▲エスペラント原作文  
學 ▲反譯文學について ▲あまりに勇敢な譯者を怖れよ ▲譯者とエ  
スぺラント ▲言語崇拜の三つの型とその克服 ▲惜字嫌字 ▲エス  
ペラント學序説 ▲日本エスペラント學事始 ▲イエツブとアチ  
ユーロイ ▲アーマ・アフエーロ ▲單語科學的の一二の問題 ▲エ  
スぺラントと子供 ▲受験地獄

ポエウ教育部編

四六上製  
二六〇頁

定價五十錢  
送料八十錢

## ★エスペラント日記

◇エスペラントの必携手帳、出来!!

内容概要  
◇記入欄、横線、約二百頁。◇マルクス、レーニン等の言葉及諺(エス文にて記入欄の上に挿入)◇プロレタリア・デー等を示した先つけ日記欄。◇日記のつけ方。◇國際通信の方法。◇エスペラント文法要綱。◇俺達の字引。◇おれたちの歴史、國際日本の二部よりなるエスペラント史社會史對照表◇エス文國際プロレタリア運動史。

秋田雨雀著

四六上製  
一七〇頁

定價八十錢  
送料六十錢

## ★初等エスペラント講座 (全一冊)

エスペラントの傳播者として、從來の學習書は餘りにも時代遅れだつた。單なる文法文例の羅列や語學教科書の燒直しでは新しい生活感情の表現たるエスペラントを獲得することは不可能だ。新しい生イデオロギーを基調とする、新しい學習書が絶対に必要だ。本書こそはかかる要求を完全に満してゐる。

伊東坂三郎著

四六上製  
三四〇頁

定價十二圓  
送料十二圓

## ★エスペラント必携

この書こそ文字通り大衆の欲求が著者を強制して書かした書だ。東奔西走の闘争裡、十年の歳月と、プロレタリア・エスペラントとしての最高のイデオロギー、技術を縱横に馳使して出來たのだ。本書は入門書であり同時に極意への指南書だ。又プロレタリア的事象の取扱ひ方であり同時に取材はソヴェートの文化建設を扱ひ國際的意識の教育に有力な道具を供給する。

エ・ドレーゼン著  
高木弘譯

四六上製  
横組寫眞入

定價八十錢  
送料六十錢

## ★エスペラント運動史

エスペラントの方面を見ても國際的問題は我々の死活の問題である。今だエスペラントの研究と實用が勃然として盛になつたのはこのためだ。展の歴史を確実に捉へることは必要だ。本質を確實に捉へる爲には飛躍的段階に當面して歴史の爲に自己を鍛へよ。

「プロ研」エスペラント研究會編著

## ★エスペラント講座 (全六卷)

再募集  
◇詳細内容見本進呈  
◇分拂 一冊八十錢  
◇全六卷 即時配本  
◇一時拂 四圓五十錢



財団法人

## 日本エスペラント學會發行圖書其他

〔東京市本郷區元町1の24・電話小石川5415番・振替東京11325番〕

エスペラント捷徑	最新最良の獨習書	上 1.00 並 0.50	各4
エスペラント講座	外國語を知らぬ人の獨習講義録	0.50	4
新撰エス和解辭典	語彙豊富、譯語正確	上 0.80 並 0.60	各2
新撰エス文手紙の書方	書簡百科辭典の觀、四六判 370 頁	1.20	8
エスペラント講習用書	文法教科書と讀本をかね	0.30	2
エスペラント短期講習書	大きな活字で要領よく編輯した	0.20	2
エスペラント初等讀本	挿繪入程度低く小中學生にも適す	0.30	2
エスペラント中等讀本	興味深き讀み物數十篇を収む	0.30	2
ザメンホフ讀本	………全3巻、各巻 0.20 (2) 合巻 0.50	4	
イソツプ物語	脚註付、講習讀本並に獨習好適	0.25	2
エスペラント發音研究	エス語發音上の疑問を氷解す	0.30	4
新撰和エス辭典	見出語數6萬、出典明示、印刷鮮明	印刷中	
點字エスペラント文法小辭典	盲人用獨習書兼字引	1.00	6
エスペラントやさしい讀み物	笑話廿二篇を對譯詳註し興味横溢	0.10	2
愛の人ザメンホフ	エス語創案者ザ博士の傳記	0.80	6
リングヴィ・レスポンドイ	ザ博士の言語上の解答を蒐む	0.50	4
エスペラントの鍵	文法及三千五百語を含む小辭典宣傳用	0.05	2
歐羅巴親類巡り	エス語のみでの世界旅行 上 0.95 並 0.35	各8	
國語の擁護を論じて國際語に及ぶ	黑板博士の歴史的論文其他を収む	0.20	2
エス譯佛說阿彌陀經	エス譯大學中庸	近刊	

## ~~~~~ エスペラント對譯詳註叢書 ~~~~~

1. マテオ・フアルコネ	0.35	2	4. 代理通譯	0.40	2
2. ハイネ詩集	0.40	2	5. 愛ある處神あり	1.50	6
3. 覺法使	0.40	2	6. レイモント短篇集	0.40	2

## ~~~~~ エスペラント書き日本叢書 ~~~~~

骸骨の舞跳	0.40	2	惜みなく愛は奪ふ	0.75	4
倫敦塔	0.15	2	ベルダ・カルト	1.00	4
ガラシヤ	0.20	2	綠葉集	0.80	4
霧の中	0.15	2	日本民族の起原	0.10	2
中村精男博士遺稿	0.70	4	日本刀概説	0.15	2

エスペラント單語カード	七百二十語に一々用例を示す	1.70	12
エスペラント文例集	カードと同一内容の本	1.00	6
ザメンホフ肖像	寫真版	0.15	2
レコード	{エス演説會話 {Espero, Tagigo	小坂氏吹込兩面	1.20 40 (内地外80)
宣傳句入横書原稿紙	獨唱、兩面	1.50 40 (内地外80)	
エスペラント便箋	20×20 天糊附100枚 0.18	バラ100枚 0.16	各6
エスペラント封緘紙	正百枚一冊	0.20	4
日本風景風俗エハガキ	八十枚入一袋	0.20	2
エス譯君が代エハガキ	四枚一組三色刷エス説明入	0.10	2
エスペラント手拭	樂譜及木版畫入、二色刷	10枚送料共	0.15
綠星章	三越特製上等	0.20	2
	甲種(安全ピン止)	乙種(背廣用)	各 (送料共) 0.30 -
	丙種(安全ピン止特製)	丁種(背廣用特製)	各 0.50 3
	カフスボタン(箱入一組)	1.20	6
綠星旗	紙製綠地に白く「エスペラント」と抜く。十枚(郵税共)	0.15	-
	ネクタイピン(送料共)	0.30	-

——〔詳細内外エス書圖書目錄二錢切手封入お申込み次第送呈〕——



La Revuo Orienta—Monata Organo de Japana Esperanto-Instituto,  
Ŝin'ogaŭamaĉi III-15, Uŝigome, TOKIO, Japanujo; abono internacia 7 svis. frankoj.

我國に於けるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

## 財團 日本エスペラント學會

東京市牛込區新小川町三の十五

—【電話牛込(34) 5415番—振替口座東京11325番】—

- 目的 エスペラントの普及、研究、實用
- 事業 { (a) エスペラントに関する各種の研究調査及其發表  
(b) 雜誌及圖書の刊行等  
(c) 講演會、講習會の開催及後援  
(d) 其他本會の目的を達成するに必要な認むる事業

尙ほ本會に關する詳細及び本會發刊書並に内外エスペラント圖書目錄は郵券二錢封入御申込み下さい

驚くべき廉價なる初等學習及宣傳用雜誌

## 初等エスペラント

本誌 La Revuo Orienta の初等向の頁を抜き、卷頭言等を附したもの

毎月五日發行 表紙共每號十六頁

誤らざる學習の指針——懇切なる獨學の伴侶

購讀料 一年分僅かに六十錢 半年分三十錢

本誌の弟分たる「初等エスペラント」を愛護して、宣傳しませう

(見本は郵券五錢封入御申込み下さい)

### 本誌購讀料 (郵税別)

一部	圓 0.20	圖書目錄及本會の詳細に關しては二錢切手封入申込まれたし。
半年分	圓 1.20	
一年分	圓 2.40	

本會振替 { 一般會計用東京11325番  
口座番號 { 基本金専用東京32089番

昭和七年六月二十五日印刷

昭和七年七月一日發行

編輯兼  
發行人

東京市本郷區元町一ノ二四  
大井 學

印刷人

東京市神田區三崎町三ノ一四六  
竹田 佐藏  
(一 民 印 刷 所)

發行所

東京市本郷區元町一ノ二四  
財團法人日本エスペラント學會

昭和七年七月一日發行 (毎月一圓一日發行)  
エスペラント研究雜誌ラ・レヴ・オ・リエンタ第三年第七號

定價貳拾錢 (送料貳錢)